

日本からみた韓半島の古代寺院金堂

箱崎和久・鈴木智大・海野 聡

1. はじめに
2. 韓半島の古代寺院金堂
3. 日本の古代寺院金堂
4. 韓半島の古代寺院金堂の特徴
5. おわりに

要 旨 東アジアの古代寺院の金堂跡については、国立扶余文化財研究所が2010年に刊行した『東アジア古代寺址比較研究Ⅱ 金堂址編』で集成されている。本稿では同書を基本データとしながら、8世紀の日本の金堂跡や現存建築を加えて、建物規模、柱配置を中心とする平面形式、基壇規模、下成基壇上に建つ礎石の性格、等について分析した。少なくとも百済・新羅の金堂の平面は、桁行5間×梁行3間が主流とみられる。日本の7世紀の金堂は桁行5間×梁行4間が主流で、8世紀になると桁行7間×梁行4間が一般的となり、柱間寸法も大きくなる。梁行を4間とする韓半島の金堂は、百済弥勒寺や百済王宮里廃寺、新羅皇龍寺にみられ、これらは、それぞれ日本の四天王寺、法隆寺、文武朝大官大寺の金堂との共通点がある。日本にもたらされた建築文化は、百済であればこれらの寺院が所在する益山地域を源流とみることができ、新羅であれば皇龍寺が規範となった可能性がある。

建物外周の柱からの基壇の出が判明する事例からは、韓半島の金堂は比較的複雑な組物を用いた上部構造をもつと想定できる。韓半島に例が比較的多い下成基壇上の礎石（遮陽間の礎石）に建つ上部構造は、裳階であった可能性が高く、新羅四天王寺や日本法隆寺の例では、創建以後の改修によるものである。8世紀の日本では、当初より裳階をもつ金堂が建てられるが、それ以前の裳階のあり方を考える上で、遮陽間の礎石とそれに伴う基壇造成については、さらに検討が必要だろう。日本の山田寺にみえるような特異な柱配置をとる例は、韓半島には現在のところ類例がなく、源流がつかめない。

キーワード 古代 金堂 平面 柱間寸法 裳階 遮陽間

1. はじめに

韓国では、近年、古代寺院の発掘調査や研究が盛んである。よく知られているように、日本で最初の本格的寺院は飛鳥寺（奈良県明日香村）だが、その創建にあたっては、百済から舍利や僧だけでなく、寺工や露盤博士、瓦博士といった技術者が渡来した。それより以前、日本への仏教の伝来にも、百済が関係している。このように百済、大きくみれば韓半島の技術が、6世紀末から7世紀に日本にもたらされ、その後の日本の建築や文化の形成に大きな影響を与えたことは疑いない。

日本で初めて天皇が創建した寺院は、639年に舒明天皇が発願し、九重塔を建立した百済大寺であるが、その遺跡は1997年に発見された吉備池廃寺が有力である。この創建年代に注目すると、新羅皇龍寺は645年に塔を建立したことが『三国史記』や木塔の「刹柱本記」等に見えるし、百済弥勒寺では西塔の舍利孔から発見された舍利奉迎記に、639年の年号がみえ、百済、新羅、日本でほぼ同時期に国家の威信をかけた大寺院の造営がおこなわれていたのである。これらの発見は、東アジアの文化の同時代性をさらに強く私たちに意識させた。そして一般的には、そういった事象にともなう技術も、同時に伝わっていたと考えられていると思う。

一方、法隆寺西院の建築群は、その後の現存建築と比べて、特異な様式をもつことが知られている。その源流については、諸要素は各時代の中国にありながらも、韓半島で混淆されたものが日本に伝わったと考えられている¹。であれば、韓半島の建築に法隆寺の建築様式と類似する特徴をもつ建築が見いだせるはずであり、それが判明すれば、技術の同時代性という点も同時に証明できることとなる。

しかし、現存する建築による直接の比較はできない。このため本稿では、6～8世紀の日本と韓半島の寺院金堂の遺跡について、現存建築とともに比較検討したい。金堂を選んだのは、寺院の中で重要な建物であり特徴がよく現れると考えられること、後述するように韓国で集成作業が進んでいること、等による。なお、塔については先行研究がある²。

近年の韓国における古代寺院跡の発掘成果は、国立扶余文化財研究所を中心とした集成作業がおこなわれており、金堂については、『東アジア古代寺址比較研究Ⅱ 金堂址編』³（以下、『金堂編』と略す）にまとめられている。ここでは日本の発掘遺構も集成され、韓国の建築史研究者による、本稿と類似する視点からの論考もある⁴。また2013年に国立扶余文化財研究所が出版した『百済寺刹研究』⁵でも、一連の集成作業から得られた研究について、百済の寺院が対象ではあるが、9名の研究者による論考がある。このような韓国の盛んな研究背景をみると、韓国国内でのこの種の研究は膨大な数にのぼるであろうが、韓国における発掘調査成果については、基本的には『金堂編』を参照することとし、必要に応じて

発掘調査報告書にあたることとしたい。

以下、本稿では、まず韓半島の金堂の特徴について発掘成果からの分析成果を述べ、つづいて日本の金堂について同様の視点で分析する。そののち、これらを比較検討して韓半島の金堂の特徴について述べることとしたい。ただし、日本の発掘遺構は集成が十分でなく、『金堂編』では7世紀を中心とした日本の遺構を収集しているが、この時期の基壇規模と柱配置が判明する寺院数は少ない。また日本の事例では、むしろ8世紀の遺構の方が調査事例が多く、その詳細も判明する。以上から、ここでは8世紀の主要遺構を含めて考察することとした。

執筆に当たっては、第2章の韓半島の金堂について鈴木智大が、第3章の日本の金堂について海野 聡が、それ以外を箱崎和久が執筆し、三者の協議を経て成稿とした。なお、海野執筆分については、JSPS 科研費26709044・26630288（ともに研究代表者、海野 聡）の研究成果の一部を含んでいる。

最後に、表記について触れておきたい。韓国では遺構を、弥勒寺址西金堂址や皇龍寺中金堂址のように、「址」を付して表記するのが一般的である。日本でも山田寺金堂跡のように、遺跡には「跡」を付するのが一般的だが、ややもすると「山田寺金堂跡の造営に当たっては」といった、遺跡を造営する作業のような確でない表現となる場合がある。この文言の意図は、あくまでも山田寺金堂跡から考えられる山田寺金堂そのものの造営の様相である。柱間寸法等や基壇外装についても、遺跡から判明する事実ではあるが、その建物が存続した時期の様相を指している。したがって、文脈上、遺跡としなければならない場合を除き、この址や跡を省略して表記する。すると法隆寺金堂ほかの現存建築と区別がつきにくくなるかもしれないが、現存建築については、「現存する海竜王寺西金堂」や「東大寺法華堂（現存）」のように、現存建築であることがわかるように表記したい。また、韓半島の上五里寺址や陵山里寺址など、地名+寺址の名称をもつ遺跡については、上五里廃寺や陵山里廃寺のように、地名+廃寺の名称に統一した。柱間寸法等の数値は、『金堂編』では統一されていなかったが、小数点以下第1位までの表記とした。このため、例えば建物桁行の全長が20.0mで、柱間3間が等間の場合、柱間寸法は6.7mと表記するが、この柱間寸法を3倍した建物全長は20.0mにならなくなってしまふ。適宜判断されたい。

2. 韓半島の古代寺院金堂

まずは『金堂編』から、韓半島の金堂の平面規模、基壇規模、基壇周囲の礎石という3つの視点について事例を整理しておこう（別表1・別図1）。ここでは、高句麗については、他王朝との関係がやや薄いことから、はじめに概略をまとめて述べることにする。

A. 高句麗の金堂

建物規模と平面形式 全8例（上五里廢寺は東・西金堂を2例とする）のうち、柱配置が判明している3例は、いずれも桁行3間×梁行2間の身舎のみの形式である。建物規模は類似し、柱間寸法は、桁行が4.8～6.0m、平均5.5m、梁行は3.8～4.1m、平均3.9mである。この柱間寸法は、後述する韓半島の他王朝や7世紀の日本に比べて、桁行は単純に大きく、梁行は身舎梁行を2間にとる例と比較すると、大きい部類に属する。このため、建物の規模（実長）は、他王朝の桁行5間、すなわち四面廂をもつ金堂と同程度である。このことは、他王朝の金堂が、高句麗の金堂の発展形としてその外側に廂を付加したのではなく、一定の建物規模の金堂の内部を身舎と廂に分割し、建物の形状や外観を整えたと解釈することが可能である。

桁行両脇間と梁行の柱間寸法、すなわち隅の間の平面「桁行脇間／梁行」の値は、1.26～1.44となり長方形を呈する。したがって、これらの金堂は、日本建築史の常識に当てはめれば、隅木を用いない切妻造の屋根形式と考えられる。

基壇規模 基壇規模が判明する8例をみると、清岩里廢寺中金堂が他例よりも一回り大きく、これを除くと、桁行が17.8～25.8m、平均22.1m、梁行が9.1～14.8m、平均12.9mである、柱配置が判明する3例の基壇規模は、平均が桁行20.2m、梁行12.1mであり、基壇規模が判明する7例よりやや小さいものの、およそ同程度とみてよいだろう。したがって、これらの建物規模はいずれも桁行3間×梁行2間と考えられる。清岩里廢寺中金堂は、他の7例の平均と比較しても桁行で10.0m、梁行で5.9m大きく、柱配置が判明する3例の柱間寸法を勘案すれば、清岩里廢寺中金堂は桁行5間×梁行3間の平面と推測できる。

このことは、中金堂と東金堂や西金堂とで規模や意匠に違いがあるのか、といった点に関連する。金堂が複数ある場合、中金堂が最も格式が高いと考えられるが、少なくとも平面形式が同様あるいは類似する例として、高句麗定陵寺、百濟弥勒寺、新羅芬皇寺、日本

飛鳥寺、川原寺があり、中金堂の規模が大きい例として、高句麗清岩里廢寺、新羅皇龍寺、日本興福寺⁶がある。平面形式が同様あるいは類似する規模でも、日本飛鳥寺や川原寺では、二重屋根をもつ建物として中金堂の格式を高く想定しており（第1図）、このような想定が妥当かどうか、今後、実証的に説明する必要がある。



第1図 川原寺復元模型

基壇の出と上部構造 建物外周の柱筋か

ら基壇縁までの「基壇の出」は、土城里廢寺が約0.7mと極めて小さいが、定陵寺東・西金堂では桁行・梁行とも約2.8mと比較的大きい。建物規模によって、軒の出も一定の大小があるであろうが、部材の実長や断面積などの木材としての寸法的な限界を考慮すれば、組物をもつ形式を想定してもよいかもしれない。日本では切妻造の建築は、時代が降っても手先の出る組物を使わないのが通例である。しかし、韓国では、鳳停寺極楽殿、修徳寺大雄殿、江陵客舎門など、国内最古級の建築において、手先を出す組物を用いた切妻造の建築があり、その後の時代の建築でも珍しくない。高句麗の遺構とは、平面形式も異なり規模も小さく、時代も隔たっているが、こういった構造・形式が古い形態を伝えている可能性も否定できない。

B. 平面規模

百濟 全18例のうち、柱配置が判明しているのは8例である。いずれも桁行は5間で、梁行は弥勒寺の中・東・西金堂と王宮里廢寺の4例が4間、他の4例は3間である。王宮里廢寺の桁行3間×梁行2間(身舎)+四面廂の平面形式が日本では一般的であり、弥勒寺中・東・西金堂の棟通りに柱を立てる総柱形式は、韓半島の他王朝にも例がなく特異な平面形式である⁷。その他の桁行5間×梁行3間の建物は、総柱形式と解釈することもできるが、梁行中央間が広いことから、桁行中央3間×梁行中央1間が身舎で、その四周に廂をもつ建物と考えるのが妥当だろう。梁行を4間にとる4例2寺院は、いずれも7世紀に益山地域に建立された寺院であり、時代的・地域的な様相があると考えられる。それを除けば、百濟では桁行5間×梁行3間の規模が主流とみられる。

建物規模は、桁行が11.9m(伝天王寺)~22.6m(東南里廢寺)で、平均が16.5m、梁行は8.1m(伝天王寺)~14.0m(弥勒寺中金堂)で、平均が11.0mである。桁行は5間で一定であるから平面形状を「梁行総長/桁行総長」で見ると、梁行3間のものは0.60~0.68、梁行4間のものは0.63~0.72となる。この数値からは、梁行柱間数が増えても実長が大きく拡大しているわけではないことがわかる。ただし、梁行3間よりも4間の方が若干大きい傾向が認められ、これは身舎梁行柱間の拡大傾向を示すものだろう。

つづいて柱間寸法を検討しよう。桁行は中央3間をほぼ等間とし、梁行は中央1間あるいは2間を両脇間以上とする。梁行全体に対する身舎の比率は、梁行3間の事例の最大が東南里廢寺で、梁行総長13.6mに対し、身舎梁行5.9mが43%に当たる。梁行4間の場合は、最小でも弥勒寺東・西金堂の50%であり、弥勒寺中金堂と王宮里廢寺はこれを超える。すなわち、身舎梁行の総長が廂の柱間寸法の合計以上となる場合に、梁行を4間とする意図がうかがえ、身舎梁行の拡大に伴って身舎を2間に割ると考えられるのである。

身舎の柱間寸法の実長は、桁行は2.6m(伝天王寺)~5.0m(東南里廢寺)で、平均3.7m。梁行は1間の場合と2間の場合があるので、身舎梁行総長をみると、4.2m(伝天王寺)~

7.4m（弥勒寺中金堂）で、平均は5.5mである。身舎梁行1間の最大値は5.9m（東南里廃寺・陵山里廃寺）である。

廂の柱間寸法（廂の出）は、桁行方向と梁行方向でいずれもほぼ同寸とする。このため、屋根は隅木をもつ入母屋造あるいは寄棟造と考えられる。実寸法は1.9m（伝天王寺）～3.9m（東南里廃寺）、平均は2.7mで、いずれも身舎の柱間寸法を超えない。さらに廂の出と身舎の柱間寸法との比は、桁行「廂（桁行端間）／桁行両脇間」は0.50（王宮里廃寺）～0.91（聖住寺第3次金堂）、梁行「廂（梁行両端間）／梁行中央間」は、梁行が3間と4間の例があるものの、0.45（伝天王寺：梁行3間）～1.00（弥勒寺東・西金堂：梁行4間）の値をとる。桁行・梁行ともに0.75を下まわるのは王宮里廃寺のみである。

二重基壇は7例あり、伝天王寺は下成基壇上に礎石をもつ。下成基壇上の礎石（遮陽間⁸）の出は1.9～2.0mであり、廂の出1.9～2.0mとほぼ同寸である。

新羅 柱配置が判明する6例のうち、皇龍寺が3時期の東金堂など5例を数え、また桁行規模が7間や9間をとるなど特異である。皇龍寺を除けば四天王寺のみとなるため、四天王寺は統一新羅の寺院とともに検討することとし、ここでは皇龍寺について考えよう。

桁行は中金堂を9間、東・西金堂を7間とし、梁行は中・東金堂を4間、西金堂を3間とする。桁行9間の例は他王朝の寺院になく、中金堂は韓半島でも別格の様相をもつ。

柱間寸法は、中金堂は、桁行・梁行、また身舎・廂とも5.0m等間とし、きわめて単純である。東金堂は第1・2次が桁行中央間を4.4m前後、両脇間を4.7m前後にとり、桁行中央間を狭くするのが特徴である。第3次になって中央間を4.7m、両脇間を4.6mとし、中央間を大きくする一般的な平面とした。梁行は身舎の中央2間をそれぞれ3.6m前後、廂の出を3.9～4.1mとし、身舎梁行よりも廂の出の大きな特異な平面となる。第3次西金堂は、身舎梁行を1間7.1mにとり、廂を4.0mとする。この身舎梁行の規模は、3時期の東金堂の身舎梁行総長とほぼ同じである。つまり、同じ身舎梁行を西金堂では1間に、東金堂では2間とし、東西の金堂で対応が分かれたようである。この様相は、東金堂が廂の出との関係を考慮せず、単純に身舎を2間に割ったもので、百済弥勒寺の東・西金堂が廂の出を身舎梁行よりも大きくしない手法よりも古いと思われる。

廂の出はいずれの金堂も桁行・梁行とも同じか近似するため、入母屋造か寄棟造の屋根と考えてよいだろう。中金堂と第一次東金堂が遮陽間をもつが、遮陽間の出は、中金堂では桁行・梁行とも3.6m、第1次東金堂では2.6m前後である。

以上、皇龍寺の3金堂は、東・西金堂の廂の出に比して身舎梁行全長がやや小さく、身舎梁行1間の傾向を残すのに対して、中金堂は柱間数だけでなく柱間寸法も大きくし、比較的単純な平面でありながら、新たな設計理念で築かれた金堂と考えられる。

統一新羅以降 先述したように、ここでは新羅四天王寺を含めて考えることとする。する

と柱配置が判明するのは5例で、そのうち3例は桁行5間×梁行3間、2例は桁行3間×梁行3間となる。柱配置をみると、桁行5間×梁行3間のうち、四天王寺と感恩寺は3間×1間の身舎の四周に廂をめぐらせた平面と考えられるが、天官寺は隅の間が桁行と梁行で異なるため、5間×1間の身舎の正背面に廂をもつ平面と考えられる。桁行3間×梁行3間の2例も、隅の間が正方形でないため、桁行3間×梁行1間の身舎の正背面に廂をもつ平面と解釈できる。これらの例はいずれも身舎梁行が1間という点で共通するが、高句麗・百濟・新羅時代にはみられない平面形式がこの時期に現れてきたことがわかる。

建物の全体規模は、四面廂の四天王寺が桁行17.8m×梁行11.4m、二面廂の天官寺が桁行17.5m×梁行10.1mで、桁行の全体規模は四面廂と二面廂で明瞭な差はない。一方、桁行3間×梁行3間の建物規模は、潤月寺が9.8m×8.1m、智谷寺が10.6m×7.7mで、梁行は同じ3間なもの、桁行5間の金堂より梁行の全体規模は小さい。桁行5間の四天王寺や感恩寺では、身舎の桁行3間の規模は10.7m前後であり、智谷寺とほとんど変わらない。ここから四面廂の建物の方が、梁行を大きくとる必要があるらしいことがわかる。

柱間寸法は、四天王寺は桁行5間を3.6m等間とするが、廂の出を桁行の柱間寸法と同じくする手法は皇龍寺中金堂に通じる。感恩寺の廂の出は、身舎桁行の71%、身舎梁行の63%で、この規模の金堂では百濟王宮里廢寺に次いで小さい。二面廂の天官寺・潤月寺・智谷寺は、天官寺が身舎梁行に対する廂の出が小さいのに対し、他の2寺は比較的大きい。

C. 基壇規模

百濟 基壇規模が判明しているのは18例ある。ここでは王興寺のような創建金堂と再建金堂や、龍井里廢寺のような第1・2次金堂も、それぞれ2例と数えている。基壇規模の値は、桁行が14.1m（扶蘇山廢寺）～32.2m（龍井里廢寺）、平均22.8m、梁行が11.1m（扶蘇山廢寺）～23.6m（帝釈寺）、平均16.9mである。この値は二重基壇の場合は下成基壇の規模を採用している。

柱配置が判明する8例の基壇規模は、桁行が17.3m（弥勒寺東金堂）～30.3m（東南里廢寺）、梁行が13.8m（弥勒寺東金堂）～21.2m（東南里廢寺）、基壇の縦横比「桁行／梁行」は、1.22（伝天王寺）～1.43（東南里廢寺）である。これらはいずれも桁行5間だが、梁行は3間のものと4間のものがある。

柱配置が不明な金堂の規模は、柱配置が判明する金堂の身舎の柱間寸法（2.6～5.0m）を勘案すれば、桁行を3間や7間には取りがたく、やはり桁行は5間とみられる。一方の梁行は、前節で検討したように、梁行を4間にとるのは、百濟では7世紀創建の益山地域の寺院であり、やはり益山に所在する帝釈寺を除けば、梁行は3間と考えてよいだろう。帝釈寺は梁行の基壇規模が最大値を示し、梁行3間の東南里廢寺よりも2.4m大きい。このため、やはり梁行4間の可能性が高いと思う。以上から、百濟の金堂は、桁行5間×梁行3

間の平面が主流で、益山地域の寺院が梁行を4間にとると考えられる。

二重基壇をもつ金堂は5例ある。基壇規模の大きな帝釈寺から、比較的小さな伝天王寺まで二重基壇を備えており、基壇規模と基壇の形式の関連はほとんどない。下成基壇の幅（上成基壇から下成基壇の出）は、基壇規模が小さな伝天王寺が最も広く約1.4mで、他は1.0m以下である。伝天王寺は下成基壇上に遮陽間の礎石を置いており、下成基壇の幅は遮陽間の礎石の有無に関連するとみられる。

基壇の出（二重基壇の場合は、建物の廂柱筋から下成基壇縁までの出）は、いずれも桁行方向と梁行方向の出が等しい、または近似する。その値の範囲は、2.0m前後（王宮里廃寺・聖住寺第3次金堂）～3.9m（東南里廃寺）で、2.4m前後（陵山里廃寺・弥勒寺東金堂）と3.0m前後（伝天王寺・弥勒寺中金堂・同寺西金堂）に集約される。廂の出との関係「基壇の出／廂の出」では、0.68（聖住寺第3次金堂）～1.64（伝天王寺金堂）だが、伝天王寺は突出して大きい。これは遮陽間の礎石をもつことと関連するだろう。つまり、伝天王寺では上成基壇上の上部構造から下成基壇外まで軒は延びず、遮陽間にかかる屋根が下成基壇を覆うと推定される。

新羅 基壇規模が判明する金堂は8例ある。このうち皇龍寺の4例は、桁行9間の中金堂と桁行7間の東金堂3例で基壇規模も大きい。また芬皇寺が3例を占め、ほかは四天王寺である。芬皇寺と四天王寺の4例の基壇規模の平均は、桁行が22.9m、梁行は17.5mとなり、百済の18例とは桁行はほぼ同じで、梁行が0.6m大きい。したがって芬皇寺の3例も桁行は5間とみてよいだろう。

基壇の縦横比「桁行／梁行」をみると、桁行が大きな皇龍寺の2金堂4例は、当然ながら細長い平面を示す。芬皇寺中金堂は1.73で、実長でも桁行が大きく、梁行が小さい特徴がある。芬皇寺東・西金堂は、桁行は小さいが梁行は四天王寺と同等の規模で、縦横比は1.12と正方形に近い値となる。中金堂と東・西金堂をもつ皇龍寺や百済弥勒寺では、建物規模だけでなく桁行・梁行の柱間寸法も中金堂が東・西金堂より大きい。これを参考にすると、中金堂は桁行5間×梁行3間、東・西金堂は桁行5間×梁行4間と想定できる。

二重基壇をもつのは、皇龍寺中金堂と同寺第1次東金堂、四天王寺の3例で、いずれも遮陽間の礎石をもつ。百済の場合と同様、基壇の規模と形式との関連はなさそうである。下成基壇の幅は、皇龍寺中金堂が約2.9m、同寺東金堂が約2.0m、四天王寺が約1.8mと、いずれも百済の例に比して大きい。これはやはりこの3例が遮陽間をもつためだろう。

基壇の出は桁行・梁行方向とも同程度である。皇龍寺第2次東金堂が約1.6mと短いが、これは第1次東金堂の上成基壇を転用したためらしい。以上から、基壇の出が判明する5例は入母屋造あるいは寄棟造の屋根形式と考えて良いだろう。

統一新羅以降 統一新羅時代以降で基壇規模が判明している金堂は6例ある⁹。前節で指

摘したように、二面廂では四面廂の場合よりも梁行規模を小さくするようであり、別表1をみると、その傾向は基壇規模でも確認できる。基壇の縦横比「桁行／梁行」は、天官寺が1.75と横長だが、これは梁行、とりわけ正背面の廂の出が小さいことによる。桁行5間で四面廂の感恩寺、桁行3間で二面廂の潤月寺と智谷寺は、いずれも1.30前後の値をとる。百済・新羅の例からみれば、感恩寺の値は標準的である。一方、桁行3間＋二面廂の金堂が、梁行が3間にもかかわらず、桁行5間＋四面廂の金堂と同等の値を示すのは、やはり梁行規模が小さいことによると考えられる。千軍洞廢寺と高仙寺はいずれも1.12を示し¹⁰、新羅芬皇寺東・西金堂とともに、韓半島における最小値を示す。

二重基壇をもつのは感恩寺で、下成基壇上には礎石を置かず、下成基壇の幅は0.7m前後である。礎石を置かない例として、その幅は適当だろう。

基壇の出が判明する4例をみると、感恩寺は約4.3mと韓半島でも皇龍寺中金堂に次いで大きく、廂の出2.5mに対しても1.72の値をとり、韓半島の金堂では最大値となる。天官寺は基壇の出が桁行約0.3m、梁行約0.1mと極めて小さい。『金堂編』所収の図をみると、礎石が上成基壇に入り込んでいるようである。総じて二面廂の3例の軒の出はやや小さく、手先の出ない組物を用いた上部構造と推定される。

D. 基壇周辺の礎石

下成基壇上の礎石 前節で述べたように、二重基壇で下成基壇上に礎石を置く（遮陽間をもつ）場合は、遮陽間のない場合に比べて下成基壇の幅が大きい。これは遮陽間の礎石を置くための幅を確保したためだろう。遮陽間を備える例は、二重基壇をもつ12例のうち、高句麗清岩里廢寺、百済伝天王寺、新羅皇龍寺中金堂、同寺第1次東金堂、新羅四天王寺の5例で、統一新羅を除く、いわゆる朝鮮三国時代に用いられていたことがわかる。桁行を9間や7間にとる皇龍寺の金堂だけでなく、桁行5間の伝天王寺や四天王寺でも用いられているが、桁行3間の建物にはない。

まず、礎石そのものをみると、四天王寺のものは円柱座の造り出しをもつ格式の高い形状だが、上成基壇上の礎石と比べると、その成が高く柱座の形状が異なる。また、上成基壇の地覆石と干渉し、礎石を切り欠いて設置しており、下成基壇上の礎石が上成基壇の基壇外装より後に設置されたことは明らかである。つまり、遮陽間は、上成基壇上の柱を用いる建物本体とは建設時期が異なり、構造的にも一体ではないと考えられる。

このとき、遮陽間のない二重基壇で、下成基壇の幅が大ききものはないので、遮陽間を備えるとともに、下成基壇の幅を大きくする改修がおこなわれたと考えられる。こういった先後関係を四天王寺以外の金堂で確認することはできないが、下成基壇上の礎石が後補であるのか、当初より設けられたものであるのかを検証することにより、その上部構造を的確に考察できるようになると思われる。

遮陽間の出（建物本体の廂柱礎石から下成基壇上礎石までの心心間距離）は、伝天王寺が約1.9m前後、皇龍寺中金堂が約3.6m、同第1次東金堂が2.6m前後、四天王寺は1.9m¹¹である。いずれも、桁行と梁行でほぼ一定である。廂の出との比「遮陽間の出／廂の出」は、伝天王寺は0.95（桁行）・1.05（梁行）、皇龍寺中金堂が0.72、同第1次東金堂が0.64（桁行）・0.66（梁行）、四天王寺が0.53となる。伝天王寺が1.0に近似するのが特異だが、それ以外は廂の1/2～2/3である。

遮陽間の性格 以上から、下成基壇上の礎石には、①四面廂をもつ建物に設置されている、②建物の四面にめぐる、③建物本体の柱筋に合わせて設置されている、④上成基壇上の礎石よりも小さい、⑤その出は桁行と梁行で一定にする、⑥廂の出の1/2～2/3とする、⑦下成基壇の幅が大きい、といった特徴があることがわかる。これらの特徴をもつ上部構造を考えると、①から一定程度の格式をもつ軒の出の比較的大きな建物に取り付く、②から構築物が建物を取り囲むように設置されるべきものである、③から建物本体の柱と横架材で連結していた可能性が大きい、④から建物本体とは一体の構造ではない、⑤から隅部で45°方向に入る部材をもつ可能性が大きい、等のことがわかる。そのうえ、四天王寺から推定されるように、⑧建物本体よりも遅く造られた、という特徴をもつとすると、遮陽間の上部構造として想定されるのは、裳階である可能性が高い。

上成基壇の出 遮陽間をもつ金堂5例の上成基壇の出（上成基壇上の建物外周柱心から上成基壇縁までの距離）は、1.6m（四天王寺）～2.2m（皇龍寺中金堂）で、遮陽間をもたない金堂4例では、感恩寺が3.5mと格段に大きいものの、弥勒寺中金堂が2.1m、同寺東金堂が1.8m、陵山里廃寺が1.6m前後と、感恩寺を除けば上成基壇の出は遮陽間をもつものと変わらないと言ってよい。すなわち遮陽間の有無にかかわらず、上成基壇の出は1.8m±0.3m程度であり、遮陽間の設置に伴って基壇を改修したとすれば、下成基壇の幅を拡大した可能性が大きい、と言えるだろう。

遮陽間の柱の断面 遮陽間の柱の断面形状は、礎石やその柱座の形状から、百済伝天王寺と新羅四天王寺は丸柱と考えられる。新羅皇龍寺中金堂は、上成基壇の礎石を含めて角柱座だが、上成基壇上の礎石を中心として丸柱の痕跡を残している。遮陽間の礎石についても、遺存する痕跡から丸柱と考えられる。高句麗清岩里廃寺の遮陽間の礎石には、角形のホゾ穴が穿たれており、百済・新羅の金堂にはみえない礎石の形式である。

3. 日本の古代寺院金堂

本章では、日本の代表的な古代寺院の金堂の事例について、前章と同様の視点で整理しよう。日本には発掘遺構のほか、現存する古代の建築があり、また建物の規模・構造が判明する文献資料や絵画資料も上部構造を考えるうえで有効である。

国立扶余文化財研究所がまとめた『金堂編』では、日本の金堂についても7世紀の遺構を中心に情報を集成している。また日本の既往研究では、大岡 實や宮本長二郎による集成と分析がある¹²。日本の発掘遺構は、『金堂編』で取り上げた以上に成果は蓄積されているが、その集成作業は、第5章で述べるように現在進行中であるので、本稿の資料は、集成途上段階の情報であることを断っておきたい。また本稿でとりあげた遺構は、7～8世紀の基壇規模と柱間寸法の判明するものに限った（別表2・別図2）。このため、基壇規模のみ、あるいは柱間寸法のみ判明する遺構や、それらの規模が確定しない遺構は含んでいない。ただし、これでは韓半島の金堂との比較に不足する部分もあるので、特徴的な遺構については考察に加えてゆくこととしたい。このほか、筆者（海野 聡）は古代寺院の第一級金堂に対する検討として、二重の屋根に関する論考を展開し、裳階の位置づけと変遷を述べたことがある¹³。ここではそれらの成果を加えながら、論を進めていきたい。

なお、ここでは694～710年の藤原京、710～784年の平城京、794年以降の平安京、にそれぞれ営まれた寺院を京内寺院と総称することとした。また、8世紀中期には、国を守護する目的で、日本の各地方（当時の日本の行政単位では国にあたる）に国分寺と国分尼寺が造営された。これらは8世紀における各国の中心的な寺院で、官立寺院としての格式を備えたものである。また『続日本紀』には759年に「国分二寺図」を頒布するという記事もあり、その実態は明確でないものの国分寺に一定の規格性が存在したこともうかがえる。本稿では7世紀の寺院（別表2の24～31）、8世紀の京内寺院（別表2の1～9・36）、国分寺（別表2の10～23）に分けて分析を進めることとし、それとは別に特異な柱配置をもつ金堂（別表2の32～35）について述べることにする。

A. 日本古代寺院金堂の特質

平面規模と柱配置 日本の金堂の平面は、身舎の梁行を2間とし、身舎の四面に柱筋を揃えて廂をめぐらせ、梁行総長を4間とするのが一般的である。梁行総長が4間を超える金堂は、①身舎梁行を3間にとる場合（東大寺、東寺）、②裳階をめぐらす場合（平城薬師寺、興福寺、東大寺、東寺）がある。すなわち、平城薬師寺、興福寺は、身舎梁行2間+廂+裳階の平面形式をもつものに対し、東大寺は身舎梁行3間+廂+裳階の平面形式をもち、東寺は身舎梁行3間+裳階の平面・構造をもつ¹⁴。東寺のような構造形式は、柱配置のみでは廂と裳階の区別が付きにくい。なお、藤原京の薬師寺（本薬師寺）は、遺構で確認できるのは桁行7間×梁行4間だが、裳階用の小型瓦が出土しており、身舎+廂+裳階という平城京の薬師寺（平城薬師寺）と同規模・同形式の金堂と考えられる¹⁵。また、下成基壇上に礎石をもつ飛鳥寺東・西金堂¹⁶は、上成基壇上の礎石が未検出ではあるが、下成基壇上の礎石に柱筋を合わせると考えれば、身舎+廂+裳階の平面形式となる。これらの多くは京内寺院である。

一方、桁行の柱間数は、7世紀の金堂は5間で、8世紀の金堂は7間を超える規模とする。身舎の規模で言うと、7世紀の金堂は3間だが、本薬師寺を初例として8世紀の金堂の多くが5間とする。国分寺ではその傾向が顕著で、別表2に掲げた14例のうち11例が該当し、例外が肥前の身舎桁行7間、薩摩・若狭の3間である。京内寺院では、文武朝大官大寺の身舎桁行7間を初例として、東大寺と西大寺薬師金堂が身舎桁行を7間とし、新薬師寺が身舎桁行を11間とする。裳階をもつ金堂（東寺を除く）は、廂と裳階の柱間4間を加えた数が総柱間数となる。裳階を含めて桁行7間を超える金堂の多くは京内寺院であり、梁行規模とともに、一般的な寺院とは格差のある第一級の規模・格式をもっていたと考えられる。ここでは、京内寺院のこのような様相を「高位化」と呼称することとし、後に検討してみたい。

なお、現存する法隆寺金堂は、身舎+廂+裳階の平面形式をもつが、裳階の柱は礎石上に立てず、基壇上に敷いた横架材（土台）の上に立てる。裳階の柱間は桁行9間×梁行7間となるものの、柱は身舎や廂と柱筋をそろえない構造であり、規模の比較は適当でなく、また京内寺院と同列に扱うことはできない。

ところで、『金堂編』の「平面」の考察では、身舎の中心部にも柱を立てる総柱型の柱配置¹⁷の事例として、崇福寺小金堂と四天王寺を挙げている。しかし、崇福寺小金堂は桁行3間×梁行2間の正面（東面）のみに廂を備えた平面形式で、確かに総柱状になるが、身舎内部の礎石は小さく、床張りの建物の柱（床束）と判断できる。また、四天王寺金堂の身舎内部の柱は、報告書をみる限り床束と考えるのは難しいが、創建当初の遺構として確認したのが桁行3間×梁行2間のみで、廂の柱を検出していない。後世の改変も大きく、当初の様相が明確でないため、別表2・別図2には掲載しなかった。日本で総柱型の可能性がある金堂としては、四天王寺金堂が挙げられるのみである。

柱間寸法 7世紀の金堂では、川原寺の身舎桁行3.6m、身舎梁行3.0mがほぼ最大規模であり¹⁸、7世紀の寺院金堂の一般的な柱間寸法をうかがうことができるとともに、川原寺の寺格を表すと考えられる。その他の7例では、身舎桁行3間を同寸とする例が多いが、高麗寺のように桁行中央間のみ広くとる例もある。身舎の柱間寸法は、桁行では1.5m（杉崎廃寺）～3.2m（法隆寺・飛鳥寺東金堂）、梁行では1.5m（杉崎廃寺）～3.2m（法隆寺）で、梁行の平均は2.4mである。身舎の桁行と梁行では、桁行中央間など桁行を大きくする例が多いが、檜隈寺では梁行をわずかに大きくする。廂の出（梁行方向）は1.5m（杉崎廃寺）～3.0m（飛鳥寺東金堂）で、平均は2.5mである。

身舎と廂の柱間寸法の関係では、身舎と廂を同寸とする例も多く、檜隈寺や高麗寺では廂の出が大きい。7世紀の金堂は廂の出が大きい例が多く、後代の金堂と比較すると特徴的である。一方、現存する法隆寺金堂は、廂の出を2.2mとし、身舎桁行・梁行の3.2mに対

して69%の値をとる。その理由は上部構造と関係するため後述する。

8世紀の京内寺院10例のうち、身舎+廂の平面をもたない海竜王寺西金堂¹⁹と、破格に大きな東大寺を除いた8例の身舎の柱間寸法は、桁行・梁行とも3.0m（本薬師寺・平城薬師寺）～5.0m（大官大寺）を測り、すべて3.0m以上の値をとる。身舎梁行の柱間寸法の平均は3.9mである。東寺の身舎梁行柱間が3.4mと比較的小さいのは、身舎梁行を3間にしたため²⁰で、仮に2間とすれば5.1mとなる。身舎桁行では、大官大寺が等間とするが、その他の寺院では中央間あるいは中央3間を大きくとり、その他の柱間と若干の差を設ける例が多い。身舎梁行との関係は、桁行中央間を大きくとる例が多いが、文武朝大官大寺は身舎梁行を5.3mとして最も大きい柱間とする。身舎と廂の柱間寸法の関係は、東寺を除けば、身舎の柱間よりも廂を小さくするのが通例で、本薬師寺と平城薬師寺が、身舎梁行と廂を同じくするのがやや特異である。

ところで、本薬師寺と平城薬師寺の平面形式は、身舎桁行を5間として8世紀の金堂の様相をもつ。しかし、柱間寸法は8世紀の金堂と比較して小さく、7世紀の様相を呈しており、過渡的な状態を示すと考えられる。平面形式および柱間寸法の両面で8世紀の様相を備えるのは、文武朝大官大寺を待たなければならない。

国分寺では、先述したように桁行が9間や5間の金堂が3例あるが、これらの柱間寸法は桁行7間の金堂と遜色ない。最も大きな柱間寸法をとるのは、駿河を除いて桁行中央間で、14例で3.6m（薩摩）～5.9m（武蔵・相模）、平均は4.5mである。また身舎梁行の柱間寸法は、駿河が金堂のなかで最大の柱間寸法をとるが、それ以外は桁行中央間と同じかそれより小さくし、上記14例で3.5m（薩摩）～4.9m（駿河）、平均は4.0mである。身舎と廂の柱間寸法を比較すると、廂の柱間寸法は薩摩を除いて桁行と梁行で同寸とし、豊後を除いて身舎梁行の柱間寸法以下とする。廂の規模は薩摩を除く13例で3.0～3.9mで、その値の幅は身舎よりも小さく、平均は3.4mとなる。これらの関係は京内寺院と共通する。なお、豊後では、身舎梁行よりも廂の出が0.1mだけ大きい。これは柱の内転び（柱を建物の内側に向かって若干傾ける技法）のためで、柱頂では身舎梁行等と同寸になると考えられる。豊後では塔でも同様の技法が確認されている。したがって、基本的には国分寺では身舎梁行よりも廂の出が大きくなる例はないと考えて差し支えない。

基壇規模 7世紀の金堂の基壇規模は、桁行方向は11m以上、約22m以下が8例あって数的には多く、梁行方向はすべての事例が9m以上、20m以下となる。官立寺院である川原寺や本薬師寺でも梁行方向は20m以下であり、相対的にこの2寺の基壇規模は大きいものの、7世紀の一般的な金堂の延長線と理解することが可能である。

文武朝大官大寺以降、8世紀の京内寺院や国分寺では、桁行方向は約30m、梁行方向は20mを超える規模がほとんどとなる。これは、これらの金堂が桁行7間であるためでもあ

るが、梁行は7世紀と同じ4間ながらも規模が拡大している。これは先述したように、8世紀になると柱間寸法が大きくなることを反映している。

基壇の形状を示す一つの指標として、基壇規模の縦横比「桁行／梁行」をみると、7世紀の桁行5間×梁行4間の金堂では1.2前後に集中する。それに対して、8世紀の金堂は1.2を超える値をとる。これらから、建物の平面が判明しなくても、基壇縦横比の値のほか、基壇規模の実長から、桁行が5間か7間かはおおよそ判断できる。

基壇の出と上部構造 通常、建物の軒先は基壇よりも平面的に外に位置し、雨水を基壇外に落とす。軒先からの雨水を直接受ける雨落溝を検出できれば、軒の出を復元する精度は高まるが、雨落溝を検出できる例は少ない。そのため、基壇の出（建物外周柱心から基壇縁までの寸法）が軒の出を推察する目安となる。ただし、基壇の出は軒の出の最低寸法となるもので、それ以上になる場合があることに注意する必要がある。

まず、現存建築の軒の出を検討しよう。雲斗雲肘木の組物を用いた法隆寺金堂は、軒が地垂木のみからなる一軒だが、軒の出は4.4mを測る。唐招提寺金堂は三手先組物を持ち、地垂木と飛檐垂木からなる二軒で、その軒の出は約4.4mである。また金堂ではないが、新薬師寺本堂は、手先を出さない大斗肘木の組物を用い、二軒で約2.4mの軒の出をもつ。東大寺法華堂は、出組の組物を持ち、二軒で、軒の出が約4.0mを測る。これらより、軒の出2.4m（約8尺）が、手先を出す組物をもつかどうかの一つの目安となるだろう。

また軒の出を検討するには、実寸法だけでなく柱間寸法との関係も考慮しなければならない。現存建築の事例はすべて四面廂をもつ建物であり、軒の出と大きく関わるのは、構造的に廂の出である。このため廂の出と軒の出の関係「軒の出／廂の出」を検討する。法隆寺金堂では $4.4/2.2=2.00$ 、唐招提寺金堂では $4.4/3.3=1.33$ 、東大寺法華堂では $4.0/3.0=1.33$ 、新薬師寺本堂では $2.4/3.0=0.80$ である。これより、手先を出す組物では、廂の出よりも軒の出が大きいと考えられる。

以上の現存建築を参考にすると、2.4mを超える基壇の出をもつ場合、あるいは廂の出よりも基壇の出が大きい場合に、手先を出す組物を備えると想定できる。7世紀の金堂の基壇の出をみると、飛鳥寺東金堂(3.2m)、川原寺(3.3m)は大きな基壇の出をもち、法隆寺(4.4m)には及ばないものの、「基壇の出／廂の出」も1.00を超えており、手先を出す組物をもつと考えられる。一方、高麗寺(2.2m)や檜隈寺(2.1m)、賞田廃寺(1.5m)の基壇の出は比較的小さい。「基壇の出／廂の出」の値は、高麗寺(0.92)、檜隈寺(0.71)、賞田廃寺(0.56)と小さく、これらは手先を出さない組物をもつと考えられる。

8世紀に入ると、建物規模と同様に基壇の出も大きくなる。京内寺院では、すべて基壇の出が3.0mを超え、東大寺の裳階の軒の出の約5.7mという破格の規模を筆頭に、興福寺と新薬師寺が4.5m程度の基壇の出で、これらは三手先組物を用いていたと考えられる。国分

寺も多くが3.0mを超えるが、そのなかでも武蔵や周防のように4.5mを超える例がいくつか確認できる。これらも京内寺院と同様、三手先組物をもつと考えてよいだろう。一方、相模（2.6m）、遠江（2.7m）、伊賀（2.9m）、出雲（2.4m）、薩摩（2.1m）の各国分寺では、廂の出に比して基壇の出は小さく、手先を出さない組物の可能性もある。

また裳階を備えた建物では、法隆寺金堂のように、裳階の軒先が建物本体（身舎+廂）の軒先よりも内側に納まるか否かという点も問題となる。この点についても以前に論じたことがあるが、8世紀初頭の興福寺中金堂までは、裳階は軒内に納まる構造であったが、東大寺大仏殿では、廂柱からの基壇の出が12mを超え、建物本体の軒は基壇の外まで延びず、雨水は裳階の屋根を介して基壇外に排水すると考えられる²¹。

また、桁行方向と梁行方向の基壇の出は、屋根形状を考えるための材料の一つとなる。別表2に掲げた遺構のうち、海竜王寺西金堂（現存）を除けば、いずれも四面廂の柱配置をもち、寄棟造あるいは入母屋造の屋根形式と考えられる。日本では、校倉を除き、振隅²²とすることはないため、軒の出は梁行方向・桁行方向ともに、ほぼ同じ大きさとなる。このため基壇の出も同程度とするのが通例である。別表2をみても、梁行方向と桁行方向の基壇の出の差は、伊賀国分寺の0.6mが最大で、多くは0.3m以下である。すなわち四面廂の柱配置をとる建物では、基壇の出を梁行・桁行ともにほぼ同じ寸法とするのである。

ところで、現存する海竜王寺西金堂は手先を出さない組物（平三斗・二軒：復元）をもつ切妻造の建物だが、梁行方向の軒の出（1.8m：復元値）と桁行方向の螻羽の出（1.7m）が近似する。このように、基壇の出だけで屋根形式を復元できるわけではないことにも注意する必要がある。

裳階の出は、東大寺の6.8mを別にすれば、平城薬師寺が1.9m、法隆寺が2.2m、興福寺中金堂が2.9m前後、東寺が3.9mである。

B. 8世紀における第一級金堂の高位化

先述したように、8世紀の金堂は桁行5間×梁行2間の身舎の四周に廂をめぐらせる定形化がみられる。それに加えて、8世紀の第一級寺院である南都六大寺（興福寺・東大寺・西大寺・薬師寺・元興寺・大安寺）や新薬師寺では、さらなる特徴をもつ。これをここでは「高位化」と仮称する。第一級寺院の金堂では、規模や外観の高位化を図ることによって、他の寺院とは異なる特徴をもつ建築を生み出していたと考えられる。

高位化の手法 結論から先に述べると、第一級寺院の高位化には、次の2つの手法が用いられたと考えられる。なお、ここでいう建物規模は建物本体（身舎+廂）に対するもので、裳階は含まない。

- ①桁行規模を拡大することで、金堂の正面観を巨大化する。
- ②裳階付き、あるいは構造上、積層させる、あるいはその両方を用いることで、意匠的

に多重の屋根とする。

①は、桁行13間の新薬師寺、桁行9間の文武朝大官大寺、東大寺、西大寺薬師金堂が該当し、桁行7間の一般的な金堂よりも桁行を大きくする手法である。②は平城薬師寺（おそらく本薬師寺も）、興福寺中金堂、東大寺、東寺が該当する²³。

一方、国分寺の金堂は、発掘調査成果から裳階を確認できる事例はなく、二重の屋根とみられる資料もないことから、積極的に二重屋根の金堂とは考えにくい。柱間寸法も唐招提寺金堂に近いものが多く、国分寺の金堂は裳階のない桁行7間×梁行4間の単層という位置づけが妥当であろう。地方において7世紀代の寺院が桁行5間×梁行4間の金堂が一般的であり、国分寺金堂の桁行7間×梁行4間の規模および柱間寸法の拡大は、それ自体がそれまでの寺院金堂からみれば高位化であったと考えられる。

二重の金堂 高位化の②の視点について、その構造をみておこう。古代の第一級金堂は屋根を二重とするものが多く（以下、二重金堂とする）、その形式は法隆寺金堂のように、構造上、二重とする建物（「積層型」と仮称する）と、建物本体の四周に裳階の屋根をめぐるせた建物（「裳階型」と仮称する）の2通りがある。これについては別稿で8世紀の金堂と7世紀以前の金堂とを比較した²⁴。その主な結論は以下の4点である。

a. 古代の寄棟造の現存建築を検討した結果、仏堂で振隅とする例はなく、振隅の手法は8世紀の校倉に限定的に用いられた特殊な方法であった。これは隅行方向に手先を出す組物と大きく関係し、三手先組物をもつ8世紀の金堂は、隅木が振隅ではなく真隅に納まっていると考えられた。

b. 8世紀の第一級の金堂の多くは二重金堂であったが、基本的に積層型ではなく、興福寺中金堂や東大寺金堂にみられるような裳階型であった。8世紀の裳階型は、東寺金堂のような身舎+裳階による柱配置は構造上困難で、身舎+廂+裳階という柱筋が身舎を中心に柱筋が三重にめぐる平面とする必要があった。また裳階の柱が角柱から丸柱へと変化し²⁵、裳階の空間を拡大することで、建物本体と裳階が一体的な空間を構成するようになった。なお本薬師寺・平城薬師寺の金堂は積層型の二重屋根の各重に裳階をめぐるせる構造と考えられるが、裳階柱は角柱であり、さらに柱間寸法や基壇規模の面からも7世紀の金堂の延長線上に位置づけられる。

c. 裳階には平面が正方形に近づくことによる建物の安定性の向上と、建物本体の柱と裳階の柱を繫梁で固定することによるバットレス効果（buttress。水平方向の圧力による倒壊を防ぐために、建物の主体の壁から突出して設けられる補強用の壁）という2つの構造的機能が考えられた。

d. 積層型から裳階型へ変化した要因として、積層型の梁行規模の限界、「二重」への欲求、梁行柱間の拡大に伴う軒の出の拡大（三手先組物の使用）の3点が大きく影響していた。

二重の屋根は、第一級金堂を高位化するうえで、主要な手法の一つであった。その構造は時代を経るにつれて、積層型から裳階型へ変化した。さらに裳階の出が非常に小さく、裳階空間が従属的な位置づけであったものが、裳階の柱間が建物本体と同等の規模になり、裳階が一定の広さの空間を獲得した点が、8世紀の第一級金堂の大きな特徴である。

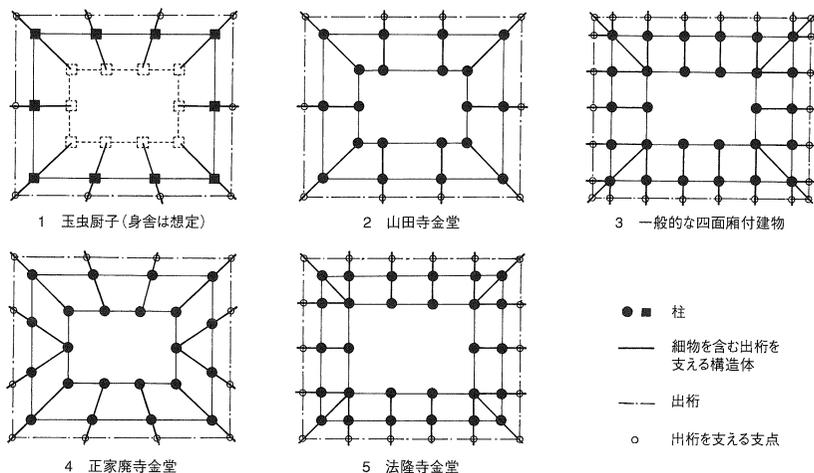
C. 特殊な柱配置をもつ金堂

山田寺・夏見廃寺・穴太廃寺（再建金堂）は、身舎・廂ともに桁行3間×梁行2間の平面をもち、柱筋の交点に柱が立たないところがある（第2図）。柱間寸法は、身舎の桁行両端間を極端に狭くし、廂をほぼ等間にとるのが特徴である。正家廃寺は身舎を桁行3間×梁行2間、廂を桁行3間×梁行3間とし、身舎と廂の対応する柱筋が放射状となり側面では身舎と廂が1対1に対応せず、身舎側面中央柱から廂柱へ2方向に柱筋が延びると想定される点で他例がない。

特異な上部構造をもつという点では、現存する法隆寺金堂もその実例である。法隆寺金堂では、先述したように廂の出（2.2m）を身舎の柱間（桁行・梁行とも3.2m）の69%と狭くする。廂柱上の組物は雲斗雲肘木と呼ぶ形態で、45°外側にしか出さず（通常は桁行・梁行・隅行の3方向に組物を出すのに対し、これは隅の1方向のみであるから「隅一組物」と仮称されている²⁶）、現存する金堂には例がない。塔を含めれば、法隆寺が所在する奈良県斑鳩地方にのみみられる形式である。

これらの基壇の出は、山田寺・穴太廃寺（再建金堂）で、建物規模が桁行3間×梁行2間と小さいにもかかわらず、基壇の出が3.5mを超え、夏見廃寺でも2.9mと大きい。これらは手先を出す形式の組物を備えていたと考えられる。

ただし、これらの寺院の講堂は一般的な身舎+廂の柱配置をもつことから、これらの平面形式は金堂にのみ用いられた特殊なものである²⁷。その上部構造は、これまでも法隆寺



第2図 特殊な柱配置の金堂

金堂の「隅一組物」との関係が指摘されてきた。それは、桁を受ける支点、つまり組物の先端どうしの距離をおよそ等しくするための柱配置上の工夫と考えられているためである。これらの金堂の創建時期は、正家廃寺が8世紀前半に降るものの、法隆寺金堂を含めて7世紀の建築であり、8世紀の金堂のように平面が定形化せず、多様性をもつ点も7世紀の金堂の特色と言えるだろう。

D. 二重基壇と下成基壇上の礎石

二重基壇は、飛鳥寺東・西金堂や法隆寺、檜隈寺など、7世紀の寺院建築には比較的多くみられる特徴で、上淀廃寺（7世紀後半）もその代表例の一つである²⁸。また、金堂以外にも塔で確認できる。一方、8世紀の官立寺院である平城薬師寺や興福寺では切石積の一重基壇であり、8世紀の事例は少ないものの、唐招提寺金堂（現存）が当初は二重基壇であった可能性が指摘されている²⁹。二重基壇が格式の高い形式であると一概には言えないが、一定の格式を示すものと考えられる。また、すでに指摘があるように、下成基壇が一定の高さをもつ場合は二重基壇と解釈できるが、基壇の外側でその高さをほとんどたない場合は、基壇であるのか犬走りであるのかの解釈が難しい³⁰。

下成基壇上に礎石を置く明確な事例は、日本では飛鳥寺東・西金堂のみである。ここでは下成基壇上に径60cm程の花崗岩自然石の礎石が据えられており、裳階柱のものと推察される³¹。下成基壇上に建つ裳階ではないが、法隆寺金堂や五重塔の裳階は、建物本体の完成後しばらくしてから造られており、建物本体の構造とはほとんど関係ない。なお塔では下成基壇上の礎石は確認されていない。

下成基壇から裳階柱が立つ場合、裳階の空間の実用性には多くを期待できず、意匠的な機能に限定されると考えられる。ただし、裳階の軒先が建物本体の軒内に納まる場合、裳階柱の礎石は（上成）基壇の縁辺部に置かれることとなる。裳階柱には、上述のバットレス効果により、構造的な負担がかかると想定できるが、基壇縁辺部に柱を配すると、基壇の破損、あるいは建物の不安定化の原因ともなりかねない。そのため、裳階を下成基壇上に置くことは理に適っていると考えられる。このとき柱が長くなるぶん、バットレス効果としての強度が問題になるかもしれない。この現象は、裳階が実用的な空間ではなく、建物本体に比べて、従属的な位置づけである時期のもの、つまり日本では東大寺金堂ができる8世紀前半までの時期のものと考えるのが妥当であろう。

4. 韓半島の古代寺院金堂の特徴

本章では、前章までで分析した韓半島と日本の寺院金堂の具体的な様相から、共通点や相違点について検討し、韓半島の古代寺院金堂の特徴をさぐるとともに、日本の古代寺院金堂の源流といった点にも言及していきたい。ただし、高句麗の金堂については大きな影

響を認めがたいため、百濟・新羅・統一新羅の金堂を中心に検討することとする。

A. 平面と基壇の規模

百濟・新羅・統一新羅では、桁行5間×梁行3間の金堂が主流で、柱配置が不明でも基壇規模からそう解釈できる金堂が多い。梁行を4間にとる百濟弥勒寺や百濟王宮里廢寺、新羅皇龍寺は、韓半島の金堂では特異な例に属する。これに対して日本では、7～8世紀を通じて梁行4間を基本とし、柱間寸法に差はあるものの定形化されていると言える。

韓旭は、百濟寺院の金堂を例に、桁行5間×梁行4間の形式が7世紀の寺院造営にかかり、日本にもたらされことを指摘している³²。百濟の寺院を対象とすれば、桁行5間×梁行4間の規模に限定されるが、新羅を含めて考えれば、桁行規模の制限はなく、身舎梁行が2間で四面廂をもつ形式が日本に定着したと考えるのが穏当であろう。

B. 平面形式

身舎梁行の規模と上部構造 百濟・新羅・統一新羅の金堂は、梁行中央の柱間寸法が大きいことから、桁行3間×梁行1間を身舎とし、その四周に廂をめぐらせた形式と解釈できる。一方、日本では、7世紀代には桁行3間×梁行2間を身舎とし、その四周に廂をめぐらす形式をとる。8世紀になると身舎桁行5間が主流となり、平城京の官立寺院では、桁行がそれ以上の規模になるもの、あるいは身舎梁行を3間とするものも現れた。

身舎梁行を1間にとると、側面が奇数間になるため中央の柱間が生じ、側面外観に中心性が現れる。そのため、基壇の階段や建物の扉を側面中央に設けても違和感がない。百濟聖住寺、新羅四天王寺、統一新羅感恩寺、統一新羅潤月寺などが、その実例である。ただし、この場合、身舎梁行の規模には制限が生じる。構造的には身舎梁行を一定程度大きくすることは可能だろうが、壁や扉といった設備の設置に問題が生じるためである。例えば、壁を設けると、壁の下地材を大きな柱間に造らなければならなくなり、横方向の下地材が長大となるため壁の強度に問題が生じる。また扉を設けると、扉自体が大きくなるとともに、大きな扉を開閉するための面積が必要となり、扉を一定の大きさに抑えたとしても、扉の脇の小壁が大きくなってしまう。

一方、身舎梁行を2間に割ると、壁の強度の問題は解消されるが、側面中央に扉を設けることができなくなる。また扉位置に合わせて基壇に階段を設けると、側面の中央に階段を配置できない。基壇側面中央に階段を設けると、階段を上った正面中央に柱が立つこととなる。ところが、身舎梁行2間の百濟王宮里廢寺では、側面の中央に階段を設けており、日本でも7世紀代の山田寺、法隆寺（現存）、8世紀の平城薬師寺では、身舎梁行が2間であるにもかかわらず、側面中央に階段を配している。いずれも金堂が回廊の内部に独立して建つ場合であり、外観の対称性を重視した階段の配置がうかがえる。

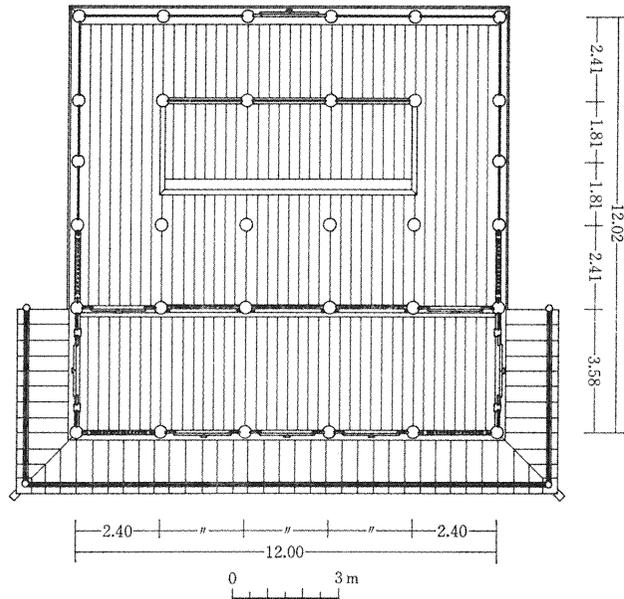
ところで、8世紀初頭の興福寺中金堂では側面前端部に回廊が取りつくため、基壇の階

段も側面前端部に設けている。このように、回廊が金堂に取りつく場合は、側面の外観を考慮する必要がなかったと考えられる。側面に回廊が取りつかず、階段が側面中央でない位置に設けた例に平城宮第一次大極殿（8世紀前期）があり、ここでは側面前方に階段の痕跡があり、これが梁行4間の正面から2間目の柱間に相当すると考えている。

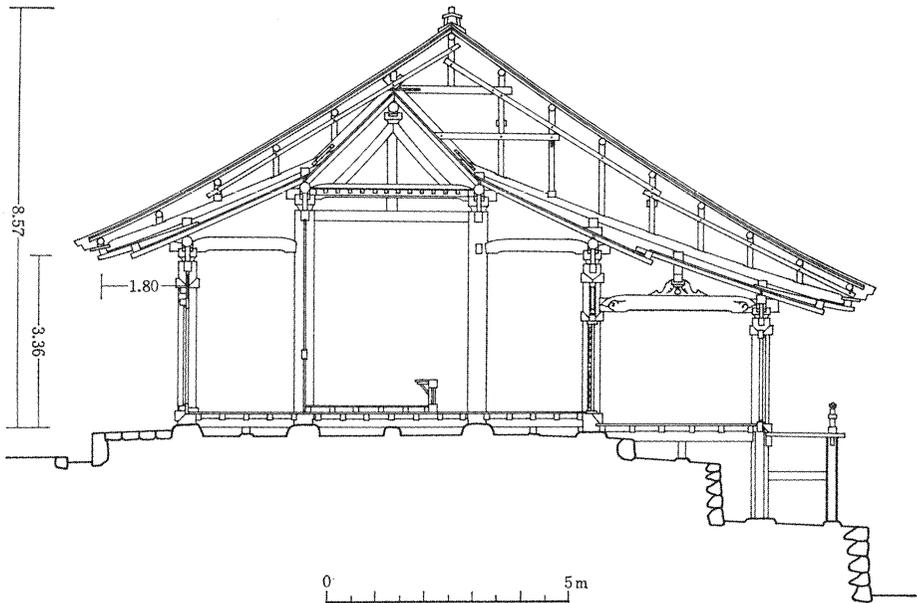
これらから、少なくとも7世紀には身舎梁行を2間としても、側面の中心性を意識しながら基壇の階段を設置している可能性があり、これは身舎梁行1間の外観上の合理性が引き継がれていると解釈することもできる。

身舎梁行1間の現存古代建築 身舎梁行1間の金堂の現存建築例として、9～10世紀と時代は若干降るが、室生寺金堂（奈良県）がある。この上部構造を確認しておこう。室生寺金堂は、桁行3間×梁行1間の身舎の四周に廂をめぐらせ、現在は正面側に17世紀頃に改修された梁行1間の礼堂を備えている。礼堂が設けられた年代には諸説あるが、礼堂がない当初の形式が、身舎梁行1間の実例となる。ただし、ここでは、側面の廂柱筋で中央間を2間に割るため、外観は梁行4間にみえるが、身舎の側面中央には柱を立てないため、梁行1間の身舎と解釈できる（第3・4図）。この平面が日本においても特異な形式であることはすでに指摘がある。その要因については、平地に営まれた整った伽藍配置をもつ寺院ではなく、山間部に営まれた寺院（日本では山林寺院と呼ぶ）である点、建物の規模がやや小さく、格式の低い建物である点などから説明がなされてきた³³。現状では屋根は寄棟造だが、当初は入母屋造であり、内部の天井はなく、すべて化粧屋根裏であったと考えられている。組物は斗肘木で手先を出さず、入母屋造の妻壁は身舎両側面の柱筋に立てる。柱間寸法は、桁行が2.4m等間、梁行は身舎が3.6m、正背面両端間が2.4mと、身舎梁行を廂の1.5倍とする。また全体に床を張る点が、古代の正統的な伽藍配置をもつ平地の寺院の金堂とは異なる。

構造的には、身舎梁行に虹梁を渡し、廂柱と身舎柱を繋虹梁でつなぐ構造で、身舎の身舎梁行を2間とする唐招提寺講堂（現存：奈良市）や、身舎梁行3間の新薬師寺本堂（現存：奈良市）と変わらない。つまり、身舎梁行の規模の違いが上部構造の違いには結びついておらず、身舎にかかる虹梁が長いかわり、あるいは身舎梁行が小さいなかで棟高を確保するため、虹梁上の叉首が比較的急勾配となる、といった程度の違いしかない。内部使用上の問題から言えば、身舎の空間はほぼ本尊等の仏像を置く空間が占めることになる。しかし、これは身舎梁行2間の場合も同じで、現存する法隆寺金堂や東大寺法華堂では、須弥壇がほぼ身舎の空間を占めている。ただし、新羅四天王寺金堂の仏像台座石の大きさや位置をみても、身舎の空間いっばいに仏像を配するわけではなく、身舎の背面側、すなわち来迎壁に寄せて仏像を配し、身舎の正面側には若干の空間を設ける形式が一般的である。したがって梁行1間の場合、仏像の大きさにはやや制限があり、また身舎の仏像前面の空



第3図 室生寺金堂平面図



第4図 室生寺金堂断面図

間は広くとれなかったと想定される。

以上から、梁行1間の韓半島の金堂の上部構造は梁行2間のものと大きく変わらないと想定される。

総柱の形式 百濟弥勒寺の3金堂にみられる、棟通りにも柱を立てる総柱の形式は、古代

日本では倉庫建築で用いられ、第3章で述べたように、金堂では四天王寺金堂がその可能性のある唯一の例である。残念ながらその上部構造については不明とせざるをえないが、総柱形式の金堂とすると、仏像の大きさや安置方法に大きな制限が生じる。棟通りの礎石について床を支える短い柱と考えることができないか、十分吟味する必要がある。

百済弥勒寺の3つの金堂の柱間寸法は、最も大きな中金堂の身舎でも桁行4.4m×梁行3.7mで、決して巨大とは言えず、大虹梁をかければ、柱を省略する手法はとれたとみられる。仏像の安置法を含めて、柱が上部構造と関連する総柱形式となり得るのかどうか、十分な検討が必要と思う。上部構造と関連する場合は、一般の形式とは異なる構造を考えなければならぬだろう。

いずれにしても、この形式は、古代の東アジアの寺院金堂では、現在のところ百済弥勒寺と日本四天王寺のみにみられる特異なものである。

C. 柱間寸法

柱間寸法の比較 金堂の柱間寸法は、韓半島・日本を問わず、身舎に当たる桁行中央3間（日本では桁行中央1間の場合もある）と梁行中央間を広く、外周の廂の出を狭くする例が多い。韓半島の桁行5間×梁行3間の規模をもつ金堂の柱間寸法は、身舎桁行が2.7~5.0m、身舎梁行が4.2~5.9m、廂が1.9~3.9mに分布している。このうち百済東南里廢寺は突出して大きいため、これを除くと、百済陵山里廢寺が身舎桁行（3.8m）と梁行（5.9m）で最大値を示し、廂の出は新羅四天王寺が3.6mの最大値を示す。

7世紀の日本における桁行5間×梁行4間の金堂では、身舎桁行が1.5~3.6m、身舎梁行は1.5~3.0m、廂の出が1.5~3.0mに分布する。このうち、すべての最小値をとるのは、日本で最小の寺院とも言われている杉崎廢寺で、これを除けば、最小値は、身舎桁行が2.1m（高麗寺）、身舎梁行が2.4m（高麗寺）、廂の出が2.4m（高麗寺・賞田廢寺）となる。身舎梁行は2間であるから、単純に2倍にすると、身舎梁行総長の値は4.2m（杉崎廢寺を含めると3.0m）~6.0mとなる。なお、現存する法隆寺金堂は廂を小さくとする特異例なので、これらとは別に検討することとする。

上記の柱間寸法を、最大の百済東南里廢寺と最小の日本杉崎廢寺を除いた値で比較すると、第1表のようになる。身舎の桁行と梁行、すなわち身舎の規模は驚くほど近似していることがわかる。身舎梁行は日本が柱間を2間にとるぶん、柱間寸法は小さいけれども身舎全体ではやや大きい。韓半島では、陵山里廢寺の身舎梁行が東南里廢寺と同じく5.9mと突出して大きい、それ以外では4.0m（感恩寺）~4.5m（聖住寺第3次金堂）と身舎梁行の値の分布の幅は小さくなる。東南里廢寺と陵山里廢寺が6世紀中期と時期的に若干古く、このため身舎梁行が大きいのであれば、6世紀末~7世紀における韓半島の金堂の身舎梁行総長は小さくなる傾向にあるようだ。また廂の出については、日本が大小の差が小さく、

韓半島では大きい。

第1表 金堂の柱間寸法の分布

母数が少なく、また時代も若干異なるため実証性が十分ではないか	単位：m		
	身舎桁行	身舎梁行全長	廂の出
韓半島5例	2.6~3.8	4.2~5.9	1.9~3.6
日本（7世紀）6例	2.4~3.6	4.2~6.0	2.4~3.0

*百済東南里廢寺と日本杉崎廢寺を除く
*日本の身舎梁行は柱間寸法の2倍

もしれないが、少なくとも身舎の

桁行規模には類似性がありそうである。7世紀代の寺院に限れば、日本では身舎梁行を拡大して柱間を2間としたのに対し、韓半島では身舎梁行の寸法を一定とし、廂の出を大きくすることで建物規模を調整した傾向を示す、と解釈できるだろう。

そのなかで、新羅四天王寺が桁行の柱間寸法を身舎と廂で等間とするのがやや特異である。桁行の身舎と廂の柱間寸法を同じくするのは、桁行9間を5.0mの柱間寸法で統一する新羅皇龍寺中金堂が、遺構が判明する中では最古である。また皇龍寺では身舎梁行を2間とするので、身舎梁行と廂の出の拡大を同時に図ったものと考えられる。新羅四天王寺は皇龍寺の柱間寸法計画を踏襲し、身舎梁行1間としながら、廂の出を大きくすることで規模の拡大を図ったものと推定される。

廂の出が大きい例 日本では、身舎の柱間寸法よりも廂の柱間寸法を大きくする事例が7世紀の遺構に比較的多い。8世紀になると、建物規模とともに柱間寸法も拡大し、廂の出が建物のなかで最も小さな柱間寸法をとるようになる。これは7世紀から8世紀にかけて、廂の出の拡大比よりも身舎の柱間寸法の拡大比が大きいことで、裏を返せば、廂の出は7世紀段階でもその実長は一定程度確保されていたと解釈することが可能である。

一方、新羅皇龍寺東金堂は桁行7間の規模をもち、第1～3次を通じて、廂の出は桁行方向では最小値となるが、梁行方向では身舎よりも大きくとる。これは、身舎梁行総長7.2～7.4mを2間に割って柱間をそれぞれ3.6～3.7mとしたため、廂の出3.9～4.1mが大きくなり、と解釈することができる。身舎梁行総長は桁行7間に相応の規模と考えられるが、身舎梁行1間でその規模が最大となる百済東南里廢寺が5.9mであったことを勘案すれば、身舎梁行の拡大に伴って、身舎の梁行を2間に割ったと解釈することが可能である。第2章で述べたように、皇龍寺第3次西金堂は、第3次東金堂と身舎梁行がほぼ同規模だが、柱間を1間としており、ここに身舎梁行の拡大にともなう対応が分かれたと考えられる。この様相は、東金堂が廂の出との関係を考慮せず、単純に身舎を2間に割ったと考えられ、百済弥勒寺の東・西金堂が廂の出を身舎梁行よりも大きくしない配慮がうかがえることを考慮すると、弥勒寺の東・西金堂よりも皇龍寺東金堂の手法は古いと思われる。

廂の出が小さい例 一方、廂の出を小さくするのが法隆寺金堂である。ここでは身舎の桁行・梁行とも3.2mに対して、廂の出を2.2m、69%にとっている。これと類似する平面をもつ金堂は、少なくとも日本にはみられないが、韓半島では百済王宮里廢寺が廂の出を2.4m

前後とし、身舎桁行4.8mに対しては50%、身舎梁行3.6mに対しては67%となる。また統一新羅感恩寺でも、廂の出を2.5mとし、身舎桁行3.5mに対して71%、身舎梁行4.0mに対して63%としている。繰り返し述べているように、韓半島では身舎梁行を1間にとる例が多く、その場合、感恩寺のように身舎梁行に対する廂の出は小さい値となる。しかし、身舎梁行が2間の王宮里廢寺が桁行・梁行の両方向で70%を下回っており、その特異性が際だっている。この上部構造については、後述することとする。

D. 基壇の出と上部構造

上部構造の推定 第2章で分析したように、韓半島における金堂の（下成）基壇の出は、最大が新羅皇龍寺中金堂の5.1m、続いて統一新羅感恩寺の4.3m前後、最小は統一新羅天官寺で、数値的には30cm以下だが、礎石との関係もあり若干検討が必要である。このほかに小さな基壇の出をもつ金堂として、2mに満たない統一新羅潤月寺と高麗智谷寺がある。

日本の事例については、第3章において、およそ2.4mを境に基壇の出と廂の出の関係などから、手先の出る組物かどうかの推定をおこなった。その結果、8世紀の京内寺院は、すべてが基壇の出が3.0mを超え、7世紀の金堂でも3.0mを超える大きな基壇の出をもつものと、2m代前半以下の小さな基壇の出のものがあつた。8世紀の国分寺ではそれが分かれた。

一方、高句麗を除く韓半島の金堂は、基壇の出が大きく、桁行方向と梁行方向の出をほぼ同規模としており、やはり複雑な組物をもった格式の高い建築と想定される。統一新羅天官寺は、基壇の出が極端に小さく、この基壇の出が軒の出に直結するとは思えず、軒先は基壇縁よりもさらに外にあると考えられる。また桁行3間×梁行3間の統一新羅潤月寺と高麗智谷寺も2mに満たない基壇の出である。これらはその規模とともに軒の出も小さく、手先の出ない組物を備えていたと考えられる。百済王宮里廢寺の基壇の出も2m前後と、比較的小さい。ただし、王宮里廢寺は1.0~1.5m突出する階段付近に溝状の遺構があり、これが雨落溝とすれば軒の出はやはり3mを超えと考えられる。

以上から、韓半島・日本とも、基壇の出だけでなく雨落溝等からの検討が必要だが、規模の大きな金堂は手先の出る組物を備え、規模が小さな金堂は手先の出ない組物を用いていると推定できる。

廂の出の小さな金堂 前節において、廂の出が身舎の柱間よりかなり小さな事例として、現存する日本法隆寺のほか、百済王宮里廢寺と統一新羅感恩寺を挙げた。王宮里廢寺は法隆寺と同様、桁行5間×梁行4間の規模をもつ点でも共通する。法隆寺金堂の組物の特徴は第3章で述べたとおりだが、法隆寺では五重塔や中門でもこの手法を用いており、このほか現存する法起寺三重塔や法輪寺三重塔（1944年焼失）にも例があつて、日本の古代寺院の塔遺構の検討でも、奈良県斑鳩地方以外の地域では確認できていない³⁴。

ただし扶余国立博物館所蔵の青銅製小塔片に隅行方向にのみ手先を出す組物が象られており、百濟地方にそういった建築があると考えられてきた³⁵。残念ながら柱配置が判明する百濟の木塔の遺構がないため、木塔では実証できなかったが、百濟でその可能性があるとするれば、王宮里廢寺金堂がその有力な候補となる。感恩寺もその可能性を否定できない。

E. 二重基壇と裳階

下成基壇上の礎石の性格 二重基壇をもつ例と、下成基壇上に礎石をもつ例が比較的豊富な点も、韓半島の金堂の特徴である。下成基壇上の礎石（遮陽間）の特徴については第2章で述べたが、その性格は第2章では裳階の柱を支持する礎石と推定した。韓国の研究者も裳階の礎石と推定しており³⁶、それを追認する結果となった。

裳階とその性格 法隆寺金堂や五重塔の初重に設けられた裳階は、建物の完成後、一定程度の時間を経たのちに造られたことが、部材の風蝕差などから判明している³⁷。これは新羅四天王寺の下成基壇の様相と共通すると思われる。他の韓半島の遺構では、遮陽間の設置時期については明確でない。

第3章で述べたように、8世紀の日本では、裳階つきの金堂は比較的例が多いが、これらは建物の意匠・構造からみて、建設後に設置されたとは考えにくい。これらは計画的に建設されたのであり、その構造的意味としては、建物本体の補強としてのバットレス効果を期待したものと第3章では推定した。当然のことながら、建物本体の柱や基壇を雨水から保護する役割も担ったと考えられる。これらはいずれも基壇上に裳階の柱を立てた例であり、法隆寺金堂は明確でないものの8世紀の裳階つき金堂は、当初から基壇上に裳階を設置することを意図して基壇の大きさが決められたことになる。

礎石設置位置と基壇 第2章で述べたように、韓半島の金堂の下成基壇の幅は、遮陽間をもつ方がもたない方より大きい。また上成基壇の出は遮陽間の有無にかかわらず1.6~2.2mで、これに対し、基壇上に裳階を置く日本の金堂の基壇の出（廂柱心から基壇縁までの距離）は、東大寺を除けば3.2~4.7mをとる。また、裳階（遮陽間）の出は、日本では東大寺・東寺を除く4例で1.9~2.9m、韓半島4例では1.9~3.6mであった。

以上から、韓半島の金堂は裳階をもつ日本の金堂に比べて上成基壇の出が小さいことがわかる。そのため、上成基壇上に裳階を設置しても、有効な裳階の空間を確保できないと考えられる。また、上成基壇上に裳階の礎石を設置するとすれば、基壇縁辺部に配置することとなり、礎石の安定性に問題が生じるだろう。上成基壇の出は、当初より二重基壇とし下成基壇をも軒下に納めるため、小さくせざるを得なかったと考えられる。日本では二重基壇をやめて基壇の出を大きくしたと解釈できる。遮陽間の礎石は、上記のような理由で上成基壇上に置くことができないため、下成基壇上に礎石を置くことになったと推察される。遮陽間をもつ韓半島の金堂が、いずれも上記のようなプロセスを経たかどうかは確

証がなく、定形化していた可能性も否定できない。第2章でも述べているように、下成基壇の築成状況や下成基壇上の礎石の設置状況について、再検討する必要があるだろう。

裳階柱の断面形 現存する8世紀までの日本の建築で裳階をもつのは、法隆寺金堂、同寺五重塔、薬師寺東塔で、時代が降ると平等院鳳凰堂（京都府宇治市；1052年）、法界寺阿弥陀堂（京都市；13世紀）などがある。いずれも裳階は角柱であり、日本では伝統的な裳階柱の仕様と考えられる。法隆寺金堂と五重塔の裳階は、上成基壇上に土台を敷いて角柱を立て、柱筋を建物本体とそえない、裳階の屋根を本瓦葺とせず板葺とする、などの他例のない特徴がある。このような構築物を遺跡で検出することはほぼ不可能と思われる。

8世紀の興福寺中金堂、東大寺大仏殿、東寺金堂は、裳階柱に丸柱を用いており、第3章で述べたように建物本体との一体化が図られている。一方、韓半島の金堂の遮陽間の柱は、百濟伝天王寺、新羅皇龍寺中金堂、新羅四天王寺では丸柱が用いられていたらしい。発掘された韓半島の金堂で遮陽間の柱が角柱であることを確認できた例はなく、現存建築と発掘遺構とでその様相が異なる事項の一つである。日本の裳階柱に角柱を用いる理由やその源流、韓半島の裳階に丸柱を用いる理由と、日本の8世紀の一部の金堂との関係の有無、などについては今後の課題である。

F. 日本の金堂建築の源流

以上、韓半島の金堂について、日本の金堂との比較検討を通じて特徴や問題点を述べてきたが、最後にこれらを総括して、日本への建築文化の伝播について若干考えてみたい。7世紀の日本に導入され、普及した金堂の平面は、桁行3間×梁行2間の身舎の四周に廂をめぐらせた形式であった。とりわけ身舎の梁行を2間とする点が重要だろう。韓半島で梁行2間の金堂を確認できるのは、現在のところ百濟の益山地域にある弥勒寺と王宮里廢寺、新羅の皇龍寺のみである。そしてこれらの寺院には、その他にもいくつか日本の寺院との共通点がある。

益山と日本 まず、王宮里廢寺金堂と共通点があるのは、法隆寺金堂である。それは、身舎の梁行を2間にとることのほか、すでに述べたように、廂の出が身舎の柱間寸法に比べて小さいこと、階段が各面の中央にあること、などである。このうち、廂の出が身舎の柱間寸法に比べて小さい特徴は、隅行方向にのみ手先を出す組物をもつ法隆寺建築の平面的特徴であり、それが王宮里廢寺金堂にも用いられていた可能性があることを示している。現在のところ、百濟の泗泚（扶余）地方や新羅には、この特徴をもつ金堂はみられない。

次に、身舎梁行が2間で、総柱の形式をとるのは韓半島では弥勒寺のみだが、日本では四天王寺金堂がその可能性をもつ唯一の事例である。

このように、日本にみられる特異な平面的特徴をもつ金堂は、いずれも百濟益山地方に存在する寺院である。益山に弥勒寺や帝釈寺が創建されたのは7世紀前半であり、四天王

寺や法隆寺の創建年代は、それらより若干遡る感があるが、伽藍建築の造営が創建より若干遅れたとすれば、益山地方の文化が導引された可能性は否定できない。一塔一金堂式（日本では四天王寺式と呼ぶ）の伽藍配置は、帝釈寺や王宮里廢寺など益山地方でも用いられており、日本の四天王寺や法隆寺若草伽藍でも採用されている。法隆寺の隅行方向にのみ手先を出す組物の直接的源流が王宮里廢寺である、といった厳密な話をしようとするれば、王宮里廢寺の創建年代や法隆寺若草伽藍の造営年代、といった議論をしなければならなくなる。ここでは日本における7世紀前半の寺院建立に、益山地方の仏教文化や建築文化が影響している可能性があることを指摘するにとどめたい。

新羅と日本 身舎梁行を2間にとる皇龍寺は、それとともに桁行7間以上の規模をとることが特徴である。第3章で扱った日本の事例では、桁行5間を超える金堂の出現は、7世紀後期の本葉師寺まで降る。ただし、第3章で掲げた事例は、基壇規模と柱間寸法がほぼ確定できるものに限ったため、そこから外れた重要な遺構がある。吉備池廢寺（百済大寺跡）がそれで、基壇規模や柱配置は明確でないものの、掘込地業と基壇版築が残存し、その規模から桁行7間程度の金堂が想定されている³⁸。吉備池廢寺は、7世紀中期の建立で本葉師寺に先行し、時期的にみても破格の規模となることは疑いない。百済大寺は2度の移建を経て文武朝大官大寺となるが、文武朝大官大寺金堂は桁行9間×梁行4間の規模をもつ。この百済大寺と文武朝大官大寺の間には、天武朝大官大寺という寺院があるが、天武朝大官大寺の所在は未だ明らかでなく、文武朝大官大寺に先行して桁行9間規模の金堂が建てられていた可能性も否定できない。

ところで、百済大寺は639年に舒明天皇によって発願され、九重塔が建てられたことが文献から知られるが、冒頭で述べたように、その建立時期は645年の新羅皇龍寺九重塔の建立時期と重なる。百済大寺九重塔（吉備池廢寺塔）の正確な基壇規模や柱配置は明確でないものの、基壇版築の残存状況からみて、皇龍寺九重塔に匹敵する大きさをもつ³⁹。

これに加えて、金堂の規模も、皇龍寺中金堂と文武朝大官大寺では、大官大寺が身舎梁行を5.3mとし、皇龍寺中金堂の5.0mより0.3m大きいこと、皇龍寺中金堂が身舎+廂に加えて遮陽間をもつこと、が異なるのみで、他の柱間寸法は5.0m等間で共通する。仮に皇龍寺の遮陽間が建立後の改修にかかるものとすれば、身舎梁行のわずかな違いのみで、皇龍寺中金堂と大官大寺金堂はほぼ同規模と言って過言でない。

こうした塔の建立時期やその規模とともに、金堂の規模が、皇龍寺と少なくとも文武朝大官大寺とが同等で、これに先行する天武朝大官大寺の金堂も同規模とすれば、大官大寺、すなわち百済大寺が、皇龍寺を意識して建てられ、あるいはそれを目指して移築改造がおこなわれた可能性は十分考えうる⁴⁰。

一方、百済大寺の建立は、国内的には蘇我氏への対抗意識による産物であること、国外

的には激動の東アジア情勢を反映して建立されたことが指摘されている⁴¹。日本最初の本格的仏教寺院である飛鳥寺の建立にあたって、百済の技術が導入されたことは文献から明らかである。それに続く7世紀前半の日本の寺院建立、具体例では四天王寺と法隆寺は、先述したように百済でも益山地域との関連が深い可能性がある。そして百済大寺とその後身の大官大寺（文武朝）が、新羅皇龍寺と類似する規模の塔や金堂をもつことは、やはり単なる偶然ではないだろう。

これが正鵠を得ているとすれば、百済大寺の建立に当たっては、新羅の最新技術の導入を意図した可能性がある。よく知られているように、『三国遺事』や皇龍寺木塔の「刹柱本記」の記事から、新羅皇龍寺九重塔の建立には百済から招聘した工匠阿非知が関与している。ここから、皇龍寺の建築技術は、あるいは百済を源流とするものかもしれない。いずれにしても、それは飛鳥寺や四天王寺、法隆寺をしのぐ巨大建築を造営する技術だったと考えられる。舒明天皇が発願した百済大寺には、従来の蘇我氏あるいは蘇我氏系列の氏族が建立した寺院をしのぐ建物規模とそれに伴う技術を必要としたのであり、同時に韓半島の巨大寺院と同等以上の規模と技術で建立することが求められたのだろう。寺院の建物規模にそれらが如実に反映されていることを読み取ることができるのではなかろうか。

その他の問題点 そうなると飛鳥寺の建立にあたって、泗泚地域の建築が影響したか、そういった技術が導引されたかが問題となろう。しかしながら飛鳥寺中金堂の様相が明確でなく、また東・西金堂も上成基壇上の柱配置が明確でないため、十分な検討ができない。

一方、飛鳥寺の伽藍配置は、高句麗にみられる一塔三金堂式であり、百済の一塔一金堂式でない点も疑問であった。その解釈の一つとして、飛鳥寺の基本的な伽藍配置は一塔一金堂式であり、東・西金堂は百済の寺院で見られる東西の附属建物である、という指摘もある⁴²。飛鳥寺東・西金堂は、二重基壇で下成基壇に礎石をもつが、百済の東西附属建物で二重基壇をもち、下成基壇に礎石を備えた例は見られていない。また建物規模や復元できる平面形式をみても、東・西金堂は附属建物でなく金堂と想定する方が自然である。ただし、下成基壇が当初から設けられていたのかどうか、東・西金堂が創建当初から建てられていたのかどうかは、再考する余地があるだろう。飛鳥寺の回廊の東西規模は、東・西金堂を置いて、なお空間に余裕があるので、東・西金堂が後代の増築とすれば、回廊の増築を伴うかもしれない。このように、飛鳥寺の伽藍配置については、現在のところ、やはり百済よりも高句麗に近いと考えざるをえない。

伽藍配置と関連するのは、日本の両薬師寺（本薬師寺・平城薬師寺）の堂塔である。両薬師寺は回廊内に東西両塔を配する双塔伽藍であり、新羅の寺院の伽藍配置と類似する。とりわけ平城薬師寺は、回廊全体が南北方向（奥行）よりも東西方向（間口）が長い矩形を呈する点のほか、回廊の縦横比や堂塔間の距離の比率等が近似する点で、新羅感恩寺と

の伽藍配置計画上の類似性が指摘されている⁴³。しかし、塔は感恩寺が石塔であるのに対し、薬師寺は木塔であるし、金堂も感恩寺は身舎梁行を1間とした桁行5間×梁行3間の堂であるのに対し、薬師寺では身舎梁行を2間とし、桁行7間×梁行4間の建物本体に裳階をめぐらせた形式で全く異なる。この金堂の平面はむしろ皇龍寺第一次東金堂に類似している。つまり、堂塔の平面や構造は、それぞれの寺院が独自にその形式を採用したと推測される。したがって、依然として両寺の伽藍配置に直接的な関係があるのか、あるいは両寺が模倣した未発見の寺院があるのかは決着しない。やはり同時代の中国の様相が気になるところである。

最後に疑問なのは、山田寺金堂のような身舎・廂とも桁行3間×梁行2間の規模をとる特異な平面形式の源流についてである。韓半島には現在のところこのような事例はみられない。ただし、山田寺の遺構に見える高い石材加工技術は、大陸の影響が大きいと考えられる。穴太廃寺からは渡来系の遺構や遺物が発見されており、やはり大陸の技術が導引されたと考えられる。この時期の中国の様相は明確でないものの、今後、韓半島でこのような遺構が発見されることを期待したい。

5. おわりに

以上、韓半島と日本の金堂について比較検討し、その類似点や相違点についてまとめ、日本への建築文化の伝播といった視点でも検討を加えてきた。しかし、こういった視点は、単に金堂だけでなく、その他の建築、例えば塔や門、講堂、回廊、さらには伽藍配置などの比較検討をおこなって、はじめて実証的に示すことができるはずである。本稿はそのための試論と位置づけたい。

日本の金堂については、7世紀の様相がまだまだ明らかでない点も多い。これは発掘調査成果は増えているものの、集成作業が十分おこなわれていないため、有効なデータが少ないという実態がある。一方、8世紀の様相は比較的判明することから、第3章では8世紀の金堂の特徴を概観したが、韓半島には8世紀の事例が少ないこともあり、比較が十分おこなえなかったきらいもある。他方、日本では発掘調査で出土した瓦の文様や製作技法を分析し、瓦範の移動や製作工人の移動といった、当時の製作背景についての研究も進んでおり、隣接する寺院や官衙との関連が明らかになってきている例も多い。こういった研究背景から、発掘遺構を集成し、建築的な視点で寺院間や寺院と官衙との関連を追究する作業が求められている。幸い筆者たちは2015年度から5ヶ年の計画で、日本の科学研究費基盤研究A「発掘遺構による古代寺院建築史の構築」（研究代表者：箱崎和久、課題番号15H02284）を得て、研究を開始した。その成果を披瀝できることを期待している。

韓国の研究のスピードは速い。2010年に『金堂編』が刊行されたが、その前年には『同

木塔編』が出版されており、さらに2012年には『同 其他の遺構編』が作られている。いずれも日本と中国の事例を収集して検討をおこなった力作である。その情報収集能力と出版までの早さには感服せざるを得ない。一方、日本の研究では、単にその遺跡だけでなく、周辺の遺跡を含めてその背景を追究する精緻な検討が積み重ねられてきている。これらの研究は、言わば複雑に絡んだ糸を解きほぐし、さらに縦糸と横糸で織り上げ、歴史を明らかにしていく行為であり、韓国と日本の関連については、韓国と日本の研究者による共同作業が必要と考えている。建築史についても、12世紀頃までは遺跡を対象とした研究が可能だが、今後も韓国の研究に追従できるよう研究を進めていきたい。

註

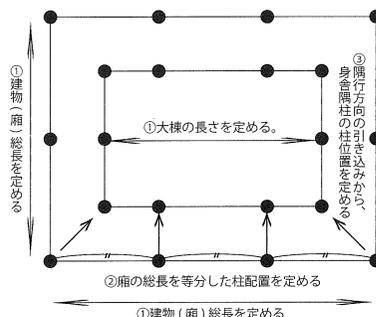
- 1 関口欣也「朝鮮三国時代建築と法隆寺金堂の様式的系統」『日本建築の特質』太田博太郎博士還暦記念論文集、中央公論美術出版、1976年。
- 2 箱崎和久「日本からみた韓半島の古代木塔址」『日韓文化財論叢Ⅱ』韓国国立文化財研究所・奈良文化財研究所、2011年。韓国版は2010年刊行。
- 3 国立扶余文化財研究所『동아시아古代寺址比較研究Ⅱ 金堂址編』2010年。
- 4 『金堂編』の考察には、「基壇」・「礎石」・「平面」が掲載されているが、それぞれの著者は明記されていない。この3つの考察の著者は、韓 旭・趙 恩慶・李 恩善・朱 東訓の4名である。さらに『金堂編』では、論考として、李 炳鎬「東アジアの古代仏教寺院と仏殿について」、鄭 子永「百済寺院の伽藍配置と展開過程についての考察 -塔・金堂址を中心に-」、箱崎和久「日本における7世紀の寺院金堂跡とその諸問題」、何 利群「北朝～隋唐時代仏教寺院についての考古学的考察 -塔、殿、院に関する変遷を中心として-」が掲載されている。なお、『金堂編』は、奈良文化財研究所が日本語に翻訳し、出版した。(奈良文化財研究所 国立扶余文化財研究所『東アジア古代寺址比較研究(Ⅱ) -金堂址編- (日本語版)』国立扶余文化財研究所 学術研究叢書第54輯、2015年)
- 5 国立扶余文化財研究所『百済寺刹研究』2013年。日本語版は2014年に奈良県立橿原考古学研究所によって翻訳・刊行されている。本稿に関連する論文としては、韓 旭「百済寺院金堂跡の平面と構造」が掲載されている。
- 6 興福寺は8世紀に創建されたものの火災と再建をくり返し、現存する東金堂は創建当初の規模・形式を保ちながら1421年に再建された建物である。中金堂はこれより規模が大きく、二重の屋根をもつなど高位化(後述)が図られている。
- 7 百済弥勒寺の3つの金堂は、成の高い礎石が平滑な礎石(報告書では礎盤石と呼んでいる)の上にある特異な形式で、基壇の高さを勘案すれば、成の高い礎石の頂部が基壇上面に現れる。中金堂と東・西金堂とも、礎盤石を確認しているものの、成の高い礎石は身舎内部の棟通り各2箇所からは発見されていない。棟通りでも礎盤石が他と同様に据えられていることから、そこに成の高い礎石が据えられていた可能性はある。弥勒寺は土間でなく床を張っていたと考えられており、棟通りの礎石は床を支える柱を支持していた可能性を否定できない。ただし、そうであれば他の柱よりも若干細くて良いはずであるが、棟通りの礎盤石の大きさは、他の礎盤石と損色がない。棟持柱と考えるか、梁を1間ごとに渡していたと考えたかは決め手がないが、上部構造に関わるとすれば、やや特異であった可能性は否めないであろう。

- 8 下成基壇の礎石の柱筋については、以下、韓国の呼称に倣い遮陽間と仮称する。想定される遮陽間の性格・機能としては、四周に屋根をめぐる裳階、床を支持する床束、垂れた軒を支持する軒支柱、などがある。また全ての建物の遮陽間が同一の性格や機能かどうかとも証明されていない。
- 9 千軍洞廃寺の基壇規模は、『金堂編』（韓国語版）では二重基壇として上成・下成の基壇規模が記されているが、数値は皇龍寺中金堂のものと同じであり、明らかに誤植である。参考文献である『昭和13年度古蹟調査報告』（朝鮮古蹟研究会、1940年）をみると、基壇規模は桁行64.6唐尺×梁行57.8唐尺（唐尺＝現尺×0.98）と記されている。これをメートルに換算すると、桁行19.2m×梁行17.2mとなる。なおこの文献では、柱配置を桁行6間×梁行5間に復元している。
- 10 千軍洞廃寺と高仙寺の柱配置は、桁行5間×梁行4間の規模と考えられるが、基壇の出もしくは廂の出が桁行と梁行で等しくならない平面の方が無理がない。つまり天官寺と同様、正背面二面廂の建物と考えるのが自然と思う。ただし高仙寺では、検出した礎石を基準に考えると、この案のようにはならない。
- 11 新羅四天王寺金堂の下成基壇上の礎石については、発掘調査報告書『四天王寺Ⅰ 金堂址』（国立慶州文化財研究所、2012年）139頁において、後代における基壇の拡張後、再び基壇を掘削する形で据えられたとしている。しかし上成基壇上の廂柱礎石との柱間寸法については、『金堂編』においても、また『四天王寺Ⅰ 金堂址』においても言及がない。本稿では、『四天王寺Ⅰ 金堂址』129頁に掲載されている平面図に基づいて計測し、桁行・梁行とも1.9mとした。
- 12 大岡 實『南都七大寺の研究』中央公論美術出版、1966年。宮本長二郎「飛鳥・奈良時代寺院の主要堂塔」『日本古寺美術全集』第2巻、法隆寺と斑鳩の古寺、集英社、1979年。
- 13 海野 聡「古代における裳階の類型化と二重金堂の変遷に関する試論」『佛教藝術』327号、2013年。
- 14 上野勝久「東寺金堂の創建形態について」『日本建築学会計画系論文集』415号、1990年。
- 15 花谷 浩「本薬師寺の発掘調査」『仏教芸術』235号、1997年。
- 16 大阪府羽曳野市の埴生廃寺金堂も二重基壇で下成基壇上に小礎石があったという報告があるが、詳細が明らかでない。藤沢一夫「河内埴生廃寺の調査」『大阪府の文化財』大阪府教育委員会、1967年。
- 17 柱配置をもとに金堂の平面構成を分類した類型で、「単一空間型」と「多空間型」に分けられる。「単一空間型」には正置型と減柱型がある。正置型はすべての柱筋に柱を置く柱配置で、減柱型は外周のみに柱を置き、内部の柱を省略する形式である。「多空間型」は並列型と内外陣型にさらに分けられるとする。多空間型は日本の身舎+廂に対応する。
- 18 ここでは屋根形式の詳細については言及しないが、桁行5間×梁行4間で屋根を寄棟造とすると、大棟が桁行中央1間の長さとなって非常に短くなる。この点を鑑みると、8世紀の第一級寺院金堂のような寄棟造は困難で、この規模の金堂は入母屋造であったのかもしれない。
- 19 現存する海竜王寺西金堂は、桁行3間×梁行2間で、廂をもたない身舎のみの建築で、平城京内に占地する金堂としては異例と言って良いほど規模が小さい。海竜王寺は平城遷都以前に創建された寺院であり、西金堂が伽藍の中心建築でないためかもしれない。
- 20 東寺金堂の場合、先述したように身舎+裳階の構造とするため、身舎柱のみで入母屋造の屋根を形成しなければならなくなる。8世紀において入母屋造や寄棟造といった隅木をもつ建物は、通常は興福寺中金堂や東大寺のように身舎+廂の平面をとる。この場合、隅木を身舎と廂の隅柱上で支持することができるため、構造上の問題はない。しかし、身舎のみの柱配置で隅木をもつ建物は、隅木を支持するのが隅柱1点のみであり技術的困難を伴う。これを補うために、両側面の柱上から桁行方向の梁（妻梁と呼ぶ）を架けたと考えられる。東寺金堂の身舎梁行総長10.2m（34尺）は、寸法的には梁行2間（各17尺）で処理することも可能と考えられるが、あえて3間に割るのは、

妻梁を二筋架けるための工夫と考えられる。この妻梁は日本に現存する古代建築では、校倉をはじめとする倉庫建築には用いられているが、金堂等の主要建築にはみられない。海野 聡「古代日本における倉庫建築の規格と屋根架構」『日本建築学会計画系論文集』692号、2013年。

- 21 裳階の礎石は建物本体の礎石に比べて小さく、遺構が確認できないこともありうるが、建物本体の隅柱から基壇端までの距離が著しく大きい場合、裳階付きの可能性を考えておく必要がある。
- 22 振隅とは、建物に対して隅木を45°よりずらす手法で、棟木を長くする方向に隅木を振るのが一般的である。
- 23 平城薬師寺は、『薬師寺縁起』（11世紀成立）に「二重二閣」と記され、二重・各層裳階付きの構造で、現存する東塔からその意匠をうかがうことができる。興福寺中金堂は、桁行7間×梁行4間の建物本体（身舎+廂）+裳階の平面形式をもつ。発掘調査成果によれば、創建以来、幾度の火災で再建を繰り返しつつ、同じ規模・形式を保ってきたと考えられている。14世紀の『春日社寺曼荼羅』には、中金堂が寄棟造の二重屋根に描かれており、建物本体の四周に裳階の屋根がめぐって二重屋根の外観をもつ建物であったことが知られる。東大寺金堂は、『七大寺巡礼私記』（12世紀中頃成立）に「二蓋」とあり、756年に描かれた「東大寺山堺四至図」にも二重・寄棟造の姿が描かれている。身舎+廂の建物本体にさらに一重の柱列がめぐる平面からみて、裳階をもつ構造と考えるのが妥当である。東寺金堂はすでに述べたように、『東寺金堂柱損色注文』（1192年）から裳階付きと推定され、発掘調査成果から現存する1603年再建の金堂と同様、身舎+裳階の構造であった。
- 24 海野 聡「古代における裳階の類型化と二重金堂の変遷に関する試論」（前掲註13）。
- 25 法隆寺金堂と平城薬師寺金堂では角柱であるが、興福寺中金堂・東大寺大仏殿では丸柱である。

- 26 隅一組物は、上野邦一が提唱した造語で、以下のように説明している。隅一組物は「側柱隅において隅行方向に外一方のみに組物を組む」もので、法隆寺金堂・五重塔の雲斗雲肘木がこの例である。隅三組物は手先の出る一般的な組物で、唐招提寺金堂のように桁行・梁行・隅行の3方向に手先が出る（上野邦一「隅一組物の建物について」『建築史学』8号、1987年）。法隆寺金堂も同様であるが、隅一組物の場合、桁材を支持する間隔が構造上重要で、これに基づく寸法設計の思想がうかがえる。法隆寺金堂では、廂の柱間寸法を等間とせず、端間を狭くすることで、出桁を受ける支点間の距離が均等となるように配慮している。ここで取り上げる特殊な柱配置の金堂も、隅の組物は隅行方向にのみ出る、と考えられている（第5図）。



第5図 特殊な柱配置の設計理念

- 27 箱崎和久「日本における7世紀の寺院金堂跡とその諸問題」『金堂編』所収。
- 28 上淀廃寺では礎石は失われており、柱配置は不明であるため、ここでは詳細に取り上げないが、基壇中心部の桁行が13.8m×梁行12.0mは瓦積で上成基壇にあたり、その外周の高さ0.3mの割石を積んだ部分が下成基壇にあたる。
- 29 『国宝 唐招提寺金堂修理工事報告書』瓦調査編・発掘調査編、奈良県教育委員会事務局文化財保存事務所、2009年。
- 30 箱崎和久「日本における7世紀の寺院金堂跡とその諸問題」（前掲註27）。
- 31 軒を支えるための軒支柱とする見解もある（大岡 實「奈良時代寺院の伽藍配置と主要堂塔」前掲註12『南都七大寺の研究』所収）。
- 32 韓 旭「百濟寺院金堂跡の平面と構造」（前掲註5）。

- 33 鈴木嘉吉「(室生寺) 金堂」『大和古寺大観』第6巻、室生寺、岩波書店、1976年。
- 34 箱崎和久「古代寺院の塔遺構」『文化財論叢』IV、奈良文化財研究所、2012年。
- 35 前掲註2の箱崎論文において、この点についてまとめた。
- 36 韓旭「百済寺院金堂跡の平面と構造」(前掲註5)。
- 37 『国宝法隆寺金堂修理工事報告』法隆寺国宝保存工事報告書第14冊、法隆寺国宝保存委員会、1962年。
- 38 箱崎和久「堂塔の復原的考察」『吉備池廃寺発掘調査報告』奈良文化財研究所、2003年。
- 39 箱崎和久「堂塔の復原的考察」(前掲註38)。
- 40 新羅皇龍寺中金堂と日本(文武朝)大官大寺金堂、さらには北魏永寧寺仏殿の規模が類似する指摘は、梁正錫「新羅・皇龍寺九重木塔の造成に関する比較史的検討」(『東アジア6～7世紀における勅願寺高層木塔の考古学的比較研究』東北学院大学論集 歴史と文化 第40号、2006年)でおこなわれている。また、ここでは、永寧寺仏殿と洛陽城太極殿、大官大寺と藤原宮大極殿の規模が類似するという指摘もあり、太極殿の形態がこれらの寺院の金堂の形態に反映されていると考えている。なお、百済大寺と文武朝大官大寺では、金堂の規模は文武朝大官大寺で大きくなって皇龍寺中金堂とほぼ同規模となるが、塔は文武朝大官大寺では百済大寺より規模が小さくなっている。その意味は明確でないが、九重塔の建立が未曾有の事業であり、技術的な改変が加えられたため、と解釈することも不可能でない。
- 41 熊谷公男「日本百済大寺の造営と東アジア」『東アジア6～7世紀における勅願寺高層木塔の考古学的比較研究』東北学院大学論集 歴史と文化 第40号、2006年。
- 42 佐川正敏「王興寺と飛鳥寺の伽藍配置・木塔心礎設置・舍利奉安形式の系譜」『古代東アジアの仏教と王権 - 王興寺から飛鳥寺へ -』勉誠出版、2010年。
- 43 奈良国立文化財研究所『薬師寺発掘調査報告』1987年。

挿図出典

- 第1図：奈良文化財研究所蔵。
- 第2図：奈良文化財研究所『山田寺発掘調査報告』2002年。
- 第3・4図：『大和古寺大観』第6巻、室生寺、岩波書店、1976年。
- 第5図：海野 聡作成。
- 別図1：鈴木智大作成。
- 別図2：海野 聡作成。

別表1 古代韓半島の金堂の平面規模

番号	建立年代	王朝名	寺院名	堂名	時期	平面類型	間数	桁行	
								総長 (m)	身舎柱間寸法 (m)
1	4 C後	高句麗	土城里麿寺	西金堂		身舎のみ	3×2	16.8	(5.6×3)
2	5 C後	高句麗	上五里麿寺	東・西金堂		—	—		—
3	5 C	高句麗	定陵寺	中金堂		—	—		—
4				西金堂		身舎のみ	3×2	17.0	(5.5、6.0、5.5)
5				東金堂		身舎のみ	3×2	14.6	(4.8、5.0、4.8)
6	5 C後	高句麗	清岩里麿寺	中金堂		遮陽間付			
7				東金堂		—	—		—
8	6 C前・中	百濟	軍守里麿寺			—	—		—
9	6 C前・中	百濟	東南里麿寺			四面廂	5×3	22.6	(5.0×3)
10	567	百濟	陵山里麿寺			四面廂	5×3	16.9	(3.8、3.7、3.8)
11	577	百濟	王興寺		創建	—	—	—	—
12					再建	—	—	—	—
13	7 C前	百濟	金剛寺			創建	—	—	—
14					再建	—	—	—	—
15	7 C	百濟	扶蘇山麿寺			—	—	—	—
16	7 C前	百濟	龍井里麿寺		1次	—	—	—	—
17					2次	—	—	—	—
18	6 C後	百濟	伝天王寺			四面廂 遮陽間付	5×3	11.9	(2.6、2.7、2.6)
19	7 C前	百濟	弥勒寺	中金堂		総柱	5×4	19.8	(4.4×3)
20				東金堂		総柱	5×4	12.7	(2.7×3)
21				西金堂		総柱	5×4	12.7	(2.7×3)
22	7 C前	百濟	帝釈寺			—	—	—	—
23	7 C中	百濟	王宮里麿寺			四面廂	5×4	19.3	(4.8×3)
24	599	百濟	聖住寺		2次	—	—	—	—
25					3次	四面廂	5×3	15.9	(3.3×3)
26	553	新羅	皇龍寺	中金堂		四面廂 遮陽間付	9×4	45.1	(5.0×7)
27				東金堂	1次	四面廂 遮陽間付	7×2	30.9	(4.7×2、4.4、4.7×2)
28					2次	四面廂	7×4	31.0	(4.7×2、4.3、4.7×2)
29					3次	四面廂	7×4	31.0	(4.6、4.7×3、4.6)
30				西金堂	1次	—	7×3	33.9	—
31					3次	四面廂	7×3	30.4	(4.3、4.4、4.7、4.4、4.3)
32	634	新羅	芥皇寺	中金堂		—	—	—	—
33				東・西金堂		—	—	—	—
34	679	新羅	四天王寺			四面廂 遮陽間付	5×3	17.8	(3.6×3)
35	7 C後	統一新羅	感恩寺			四面廂	5×3	15.5	(3.5×3)
36		統一新羅	天官寺			二面廂	5×3	17.5	(3.5×5)
37		統一新羅	潤月寺			二面廂	3×3	9.8	(2.7、4.4、2.7)
38		統一新羅	千軍洞麿寺			—	—	—	—
39		統一新羅	高仙寺			—	—	17.3	6.6
40		高麗	智谷寺			二面廂	3×3	10.6	(3.4、3.7、3.4)

※ 間数・総長は遮陽間を除いたもの。

柱間							基壇			基壇の出			
廂 の出 (m)	遮陽間 の出 (m)	梁行					桁行 ／梁行	桁行 (m)	梁行 (m)	桁行 ／梁行	桁行 (m)	梁行 (m)	桁行 ／梁行
		総長 (m)	身舎柱間 寸法 (m)	廂 の出 (m)	遮陽間 の出 (m)	桁行 ／梁行							
—	—	7.8	(3.9×2)	—	—	2.15	18.0	9.1	1.98	0.6	0.7	0.92	
—	—	—	—	—	—	—	25.8	12.6	2.05	—	—	—	
—	—	—	—	—	—	—	17.8	14.8	1.20	—	—	—	
—	—	8.2	(4.1×2)	—	—	2.07	22.6	13.8	1.64	2.8	2.8	1.00	
—	—	7.6	(3.8×2)	—	—	1.92	20.0	13.4	1.49	2.7	2.9	0.93	
—	—	—	—	—	—	—	上成 32.1	18.8	1.71	—	—	—	
—	—	—	—	—	—	—	24.5	14.0	1.75	—	—	—	
—	—	—	—	—	—	—	27.3	18.2	1.50	—	—	—	
3.8	—	13.6	5.9	3.9	—	1.66	30.3	21.2	1.43	3.9	3.8	1.01	
2.9	—	11.3	5.9	2.7	—	1.50	下成 21.6	16.2	1.33	2.3	2.5	0.95	
—	—	—	—	—	—	—	上成 19.9	14.5	1.37	—	—	—	
—	—	—	—	—	—	—	下成 22.7	16.6	1.37	—	—	—	
—	—	—	—	—	—	—	21.5	15.4	1.40	—	—	—	
—	—	—	—	—	—	—	21.2	17.8	1.19	—	—	—	
—	—	—	—	—	—	—	19.0	13.9	1.37	—	—	—	
—	—	—	—	—	—	—	14.1	11.1	1.27	—	—	—	
—	—	—	—	—	—	—	30.8	20.2	1.52	—	—	—	
—	—	—	—	—	—	—	32.2	21.6	1.49	—	—	—	
2.0	1.9	8.1	4.2	1.9	2.0	1.47	下成 18.0	14.7	1.22	3.1	3.3	0.91	
—	—	—	—	—	—	—	上成 15.3	12.0	1.28	—	—	—	
3.3	—	14.0	(3.7×2)	3.3	—	1.41	下成 25.9	20.2	1.28	3.1	3.1	0.98	
—	—	—	—	—	—	—	上成 24.0	18.2	1.32	—	—	—	
2.3	—	9.2	(2.3×2)	2.3	—	1.38	下成 17.3	13.8	1.25	2.3	2.3	1.00	
—	—	—	—	—	—	—	上成 16.3	12.8	1.27	—	—	—	
2.3	—	9.2	(2.3×2)	2.3	—	1.38	18.5	15.2	1.22	2.9	3.0	0.97	
—	—	—	—	—	—	—	下成 31.6	23.6	1.34	—	—	—	
—	—	—	—	—	—	—	上成 29.6	20.8	1.42	—	—	—	
2.4	—	12.2	(3.6×2)	2.5	—	1.58	下成 23.2	16.3	1.42	2.0	2.1	0.95	
—	—	—	—	—	—	—	上成 —	—	—	—	—	—	
—	—	—	—	—	—	—	15.9	12.9	1.23	—	—	—	
3.0	—	10.5	4.5	3.0	—	1.51	20.0	14.4	1.39	2.1	2.0	1.05	
—	—	—	—	—	—	—	下成 55.3	30.3	1.83	5.1	5.0	1.02	
5.0	3.6	20.0	(5.0×2)	5.0	3.6	2.26	上成 49.5	24.4	2.03	—	—	—	
—	—	—	—	—	—	—	下成 38.2	22.7	1.68	3.6	3.7	0.97	
3.9	2.5	15.4	(3.6×2)	4.1	2.7	2.01	上成 34.1	18.8	1.81	—	—	—	
—	—	—	—	—	—	—	34.1	18.8	1.81	1.5	1.7	0.89	
4.1	—	15.4	(3.7×2)	4.0	—	2.01	—	—	—	—	—	—	
3.9	—	15.0	(3.6×2)	3.9	—	2.07	35.8	19.9	1.80	2.4	2.4	0.99	
—	—	21.9	—	—	—	1.55	—	—	—	—	—	—	
4.1	—	15.1	7.1	4.0	—	2.01	—	—	—	—	—	—	
—	—	—	—	—	—	—	26.6	15.4	1.73	—	—	—	
—	—	—	—	—	—	—	20.3	18.1	1.12	—	—	—	
3.6	1.9	11.4	4.3	3.6	1.9	1.56	下成 24.5	18.2	1.35	3.4	3.4	0.99	
—	—	—	—	—	—	—	上成 20.9	14.6	1.43	—	—	—	
2.5	—	9.0	4.0	2.5	—	1.72	下成 23.8	17.6	1.35	4.2	4.3	0.97	
—	—	—	—	—	—	—	上成 22.5	16.0	1.41	—	—	—	
—	—	10.1	5.7	2.2	—	1.73	18.0	10.3	1.75	0.3	0.1	2.50	
—	—	8.1	3.3	2.4	—	1.21	13.8	10.7	1.29	2.0	1.3	1.54	
—	—	—	—	—	—	—	19.2	17.2	1.12	—	—	—	
5.4	—	15.3	—	—	—	1.13	18.5	16.5	1.12	0.6	0.6	1.00	
—	—	7.7	3.6	2.1	—	1.38	12.7	9.7	1.31	1.1	1.0	1.05	

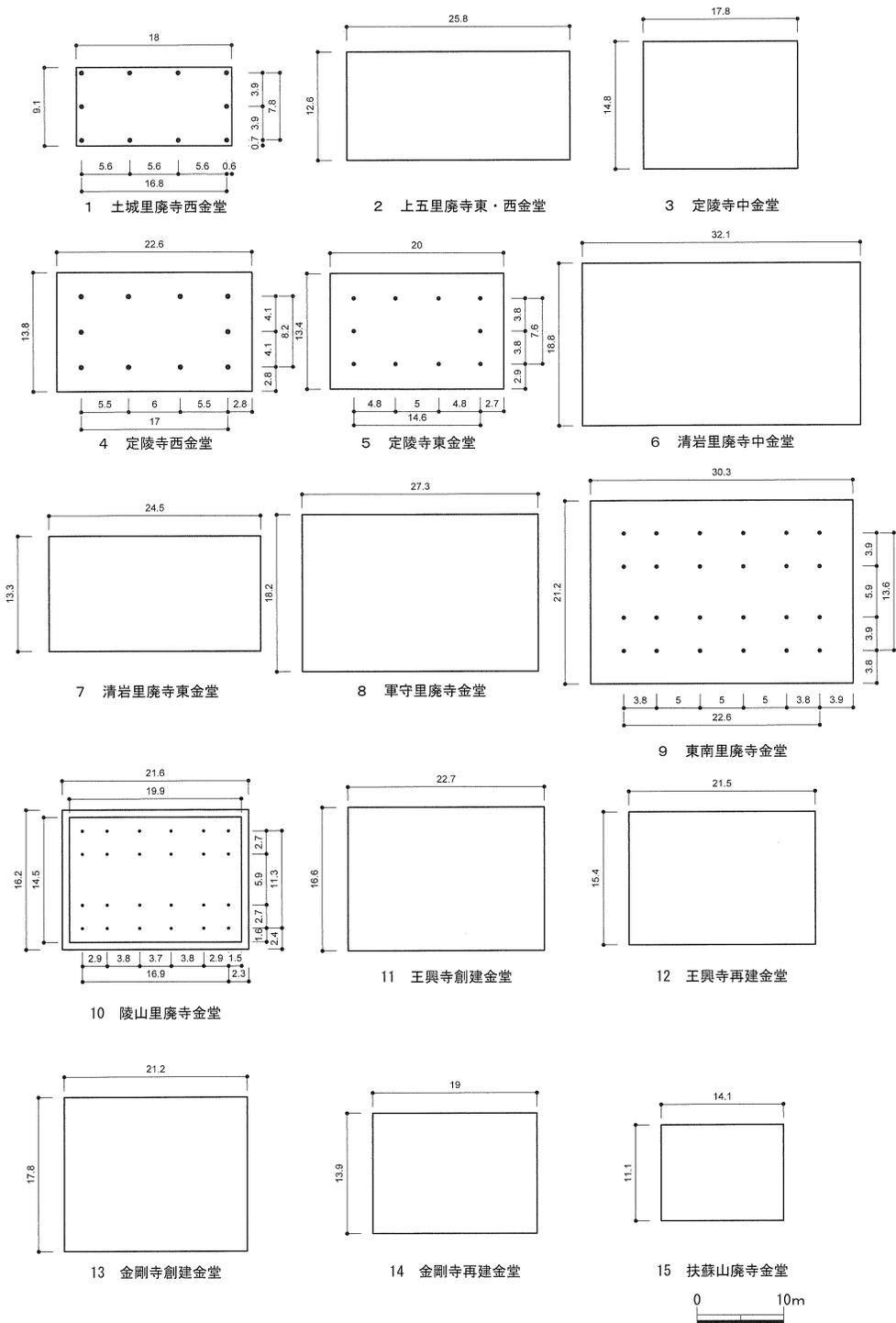
別表2 古代日本の金堂の平面規模

番号	寺院名	年代	柱間				
			間数	桁行		梁行	
				身舎柱間 寸法(m)	廂の出 (m)	身舎柱間 寸法(m)	廂の出 (m)
1	新薬師寺	8世紀中頃	13×4力	4.5×4, 5.1×3, 4.5×4	3.9	3.9×2	3.9
2	東大寺	8世紀中頃	9×5	7.7, 8.6×2, 8.9, 8.6×2, 7.7	6.8	7.7×3	6.8
3	西大寺薬師金堂	8世紀後半	9×4力	3.6, 3.9, 4.4×3, 3.9, 3.6	3.6	4.3×2	3.6
4	大官大寺(文武朝)	8世紀初	9×4	5.0×7	5.0	5.3×2	5.0
5	興福寺(中金堂)	8世紀前半	7×4	4.3, 4.7×3, 4.3	4.1	4.4×2	4.1
6	薬師寺	8世紀前半	7×4	3.0, 3.7×3, 3.0	3.0	3.0×2	3.0
7	本薬師寺	7世紀末	7×4	3.0, 3.7×3, 3.0	3.0	3.0×2	3.0
8	東寺	9世紀初	7×5	5.1×2, 5.4, 5.1×2	3.9	3.4×3	3.9
9	唐招提寺	8世紀後半	7×4	3.3, 3.9, 4.5×3, 3.9	3.3	4.0×2	3.3
10	肥前国分寺	8世紀中頃力	9×4力	3.3×2, 4.2×3, 3.3×2	3.3	3.6×2	3.3
11	武蔵国分寺	8世紀中頃	7×4	5.4, 5.9×3, 5.4	3.9	4.5×2	3.9
12	相模国分寺	8世紀後半力	7×4	4.8, 5.9×3, 4.8	3.6	4.8×2	3.6
13	飛騨国分寺	8世紀中頃力	7×4	3.6, 4.2×3, 3.6	3.3	3.6×2	3.3
14	美濃国分寺	8世紀後半力	7×4	4.2×2, 4.8, 4.2×2	3.9	4.2×2	3.9
15	駿河国分寺	8世紀中頃力	7×4	4.5×5	3.6	4.9×2	3.6
16	遠江国分寺	8世紀中頃	7×4力	4.2×2, 4.8, 4.2×2	3.0	4.8×2	3.0
17	伊賀国分寺	8世紀中頃力	7×4	3.6×2, 4.2, 3.6×2	3.0	3.6×2	3.0
18	出雲国分寺	8世紀中頃力	7×4	4.2×5	3.3	4.2×2	3.3
19	周防国分寺	8世紀中頃	7×4	3.6, 3.9×3, 3.6	3.0	3.6×2	3.0
20	讃岐国分寺	8世紀中頃力	7×4	3.9, 4.2, 4.8, 4.2, 3.9	3.6	3.6×2	3.6
21	豊後国分寺	8世紀後半	7×4力	3.6×2, 3.8, 3.6×2	3.7	3.6×2	3.7
22	薩摩国分寺 (創建金堂)	8世紀後半	5×4	3.6×3	2.6, 2.2	3.5×2	2.7, 2.5
23	若狭国分寺	8世紀後半力	5×4	4.8×3	3.6	3.9×2	3.6
24	観世音寺	8世紀前半	5×4力	3.7×3	2.6	2.6×2	2.6
25	法隆寺	7世紀後半	5×4	3.2×3	2.2	3.2×2	2.2
26	飛鳥寺(東金堂)	6世紀末	5×4	3.2×3	3.0	2.6×2	3.0
27	川原寺	7世紀後半	5×4	3.6×3	3.0	3.0×2	3.0
28	檜隈寺	7世紀後半	5×4	2.7×3	2.9	2.8×2	2.9
29	高麗寺	7世紀後半	5×4	2.1, 2.7, 2.1	2.4	2.1×2	2.4
30	賞田廃寺	7世紀後半	5×4	2.4×3	2.4	2.3×2	2.7
31	杉崎廃寺	7世紀末	5×4	1.5, 1.8, 1.5	1.5	1.5×2	1.5
32	山田寺	7世紀中頃	3×2	2.0, 4.8, 2.0	2.9	2.9×2	2.9
33	夏見廃寺	7世紀末	3×2	1.4, 2.9, 1.4	1.5	1.9×2	1.5
34	穴太廃寺(再建金堂)	7世紀後半	3×2	2.2, 4.7, 2.2	2.5	2.8×2	2.5
35	正家廃寺	8世紀中頃	3×3	1.5×3	1.5	1.5×2	1.5
36	海竜王寺(西金堂)	8世紀前半	3×2	3.0×3	-	3.0×2	-

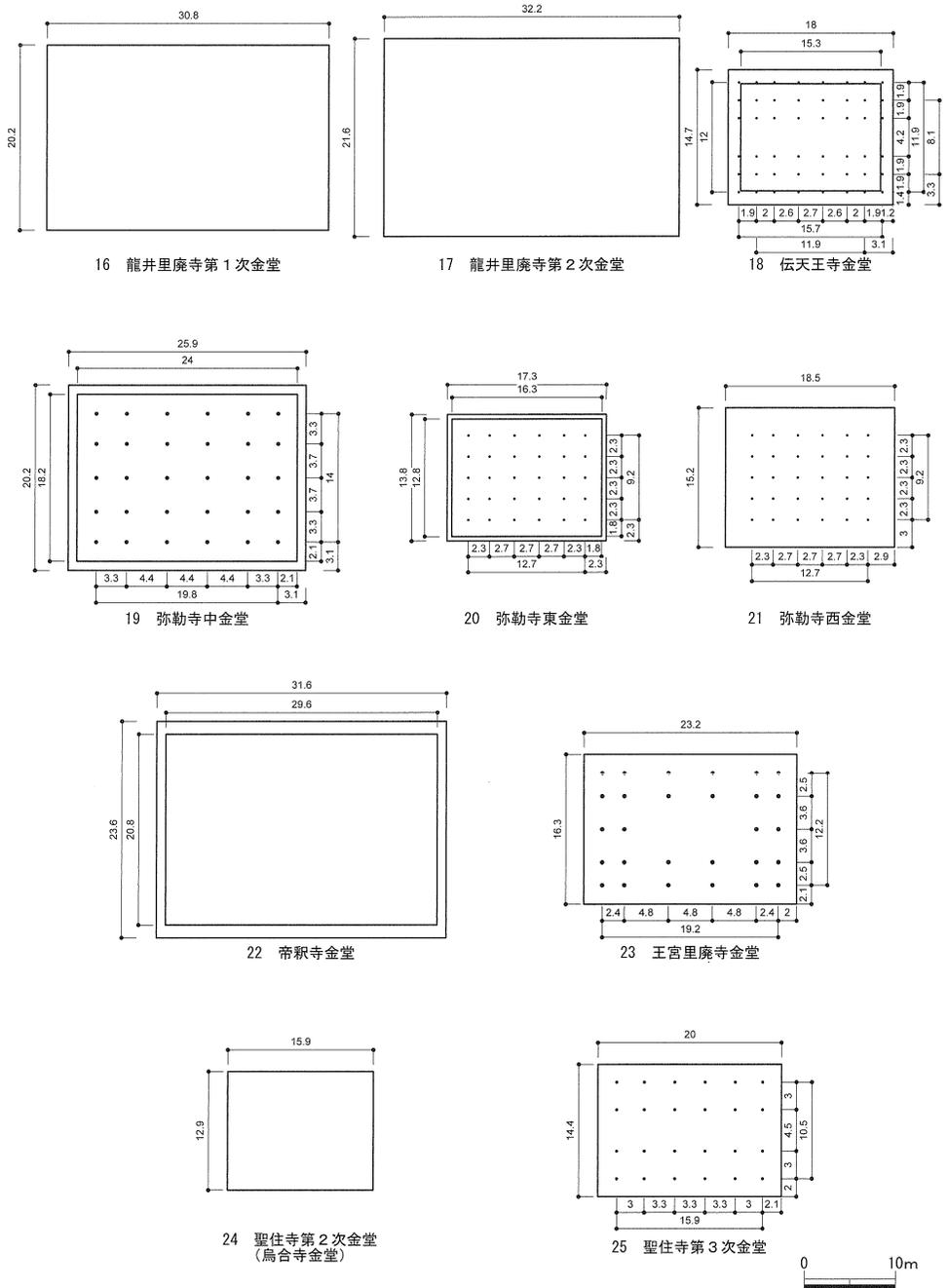
* 柱間・間数には裳階を含めていない。また柱間寸法・基壇総長は四捨五入し、10cm単位までとしている。そのため、柱間総長と基壇の出の合計が基壇総長と一致しないものもある。

* アミカケは基壇の出が約4.5m(15尺)をこえるもの。

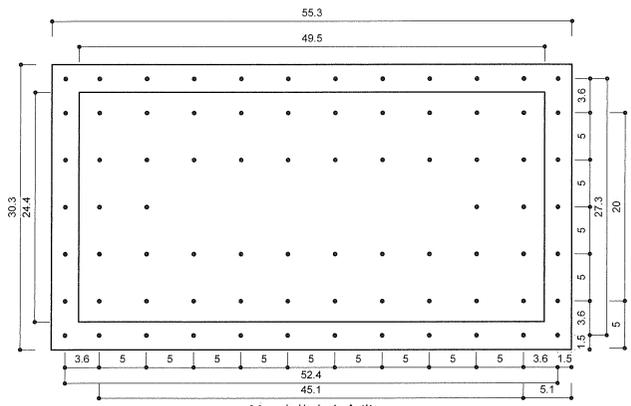
形式	基壇					備考
	桁行		梁行		桁行／ 梁行	
	総長 (m)	基壇の 出(m)	総長 (m)	基壇の 出(m)		
壇正積	68.0	4.5	29以上	-	-	
壇正積	97.2	5.7	61.2	5.5	1.59	裳階付(裳階の出6.8m)。基壇の出は裳階隅柱から。
壇正or 切石積	42.3	3.45	22.8	3.5	1.86	
切石積	53.0	3.9	28.5	3.9	1.86	
壇正積	40.3	4.7	27.1	4.6	1.49	裳階付(裳階の出桁行2.8m、梁行3.0m)。基壇の出は主屋隅柱から。
壇正or 切石積	29.4	3.2	18.3	3.2	1.61	裳階付(裳階の出1.9m)。基壇の出は主屋隅柱から。
切石積	29.5	3.2	18.2	3.1	1.62	裳階付カ。基壇の出は主屋隅柱から。
切石積	42.2	4.3	26.8	4.4	1.57	現存遺構と同規模。
壇正積	36.4	4.2	23.0	4.2	1.58	現存遺構。二重基壇の可能性あり。
不明	39.4	3.5	20.8	3.5	1.89	
乱石積	45.5	4.6	26.4	4.8	1.72	
葺石状	40カ	2.8	22カ	2.6	1.82	
-	-	-	-	-	-	基壇不明。
磚積	36.5	3.55	22.9	3.35	1.59	
乱石積	37.0	3.1	23	3.1	1.61	
木製	33.3	2.7	21.5	3.0	1.55	
不明	31.5	2.9	20.2	3.5	1.56	
瓦積	33.0	2.7	19.8	2.4	1.67	
磚積	33.9	4.5	22.2	4.5	1.53	
-	-	-	-	-	-	基壇不明。
乱石積	32.6	3.5	21.6	3.5	1.51	
乱石積	20.2	2.3	16.3	2.1	1.24	各面で四面廂の出が異なる。
乱石積	28.8	3.6	21.9	3.5	1.32	
瓦積	24.0	3.9	18.0	3.8	1.33	
切石積	22.0	4.0	19.5	4.4	1.13	現存遺構。二重。裳階付(裳階の出は2.2m。)。基壇の出は主屋隅柱から。二重基壇。
乱石積 カ	21.9	3.2	17.4	3.1	1.26	二重基壇。下成基壇上に礎石アリ。下成基壇上の礎石の出は1.95m。基壇寸法は下成基壇のもの。
壇正or 切石積	23.4	3.3	19.2	3.6	1.22	
乱石積	18.0	2.1	15.5	2.1	1.16	二重基壇。下成基壇上に礎石は不明。基壇寸法は下成基壇のもの。
瓦積	16.0カ	2.2	13.4	2.2	1.19	
瓦積カ	15.0	1.5	13.0	1.5	1.15	
乱石積	11.3	1.8	9.0	1.5	1.26	二重基壇。基壇寸法は下成基壇のもの。
壇正積	21.6	3.6	18.5	3.5	1.17	放射状柱配置。
玉石積	14.4	2.9	11.8	2.5	1.22	放射状柱配置。基壇は地山+盛土。
瓦積	22.1	4.0	18.7	4.0	1.18	放射状柱配置。基壇の出が大きい。
盛土	11.1	1.8	9.1	1.6	1.22	放射状柱配置。
壇正積	12.2	1.6	9.3	1.7	1.31	現存遺構。切妻造。



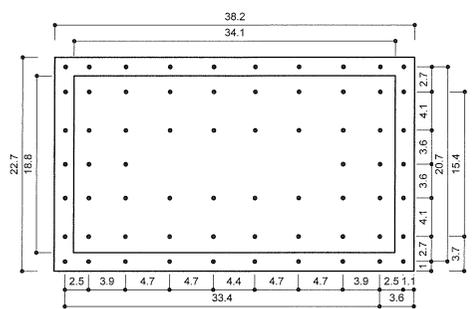
別図1-1 古代韓半島の金堂の平面復元模式図 1:800 (番号は別表1に対応)



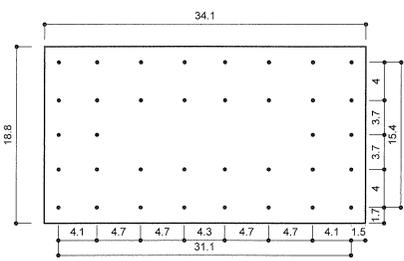
別図 1-2 古代韓半島の金堂の平面復元模式図 1:800 (番号は別表 1 に対応)



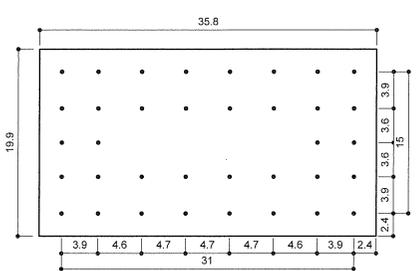
26 皇龍寺中金堂



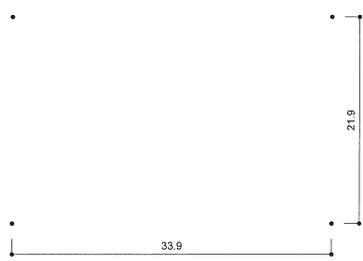
27 皇龍寺第1次東金堂



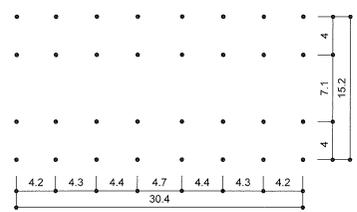
28 皇龍寺第2次東金堂



29 皇龍寺第3次東金堂

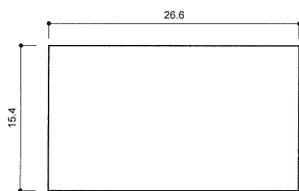


30 皇龍寺第1次西金堂

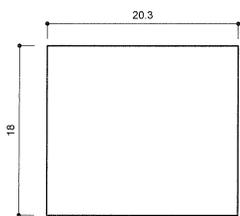


31 皇龍寺第3次西金堂

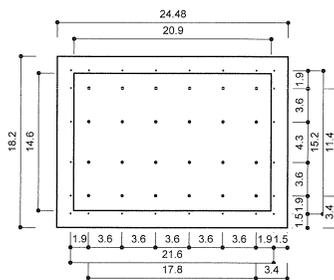
別図1-3 古代韓半島の金堂の平面復元模式図 1:800 (番号は別表1に対応)



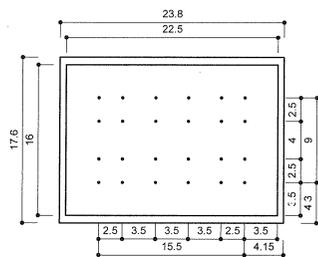
32 芬皇寺中金堂



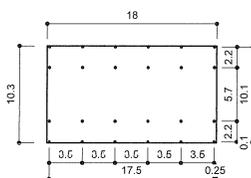
33 芬皇寺東・西金堂



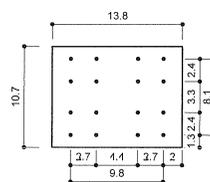
34 四天王寺金堂



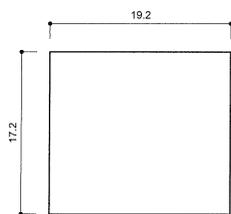
35 感恩寺金堂



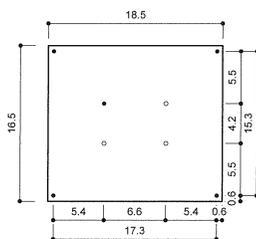
36 天官寺金堂



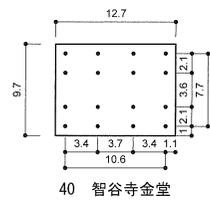
37 潤月寺金堂



38 千軍洞麁寺金堂



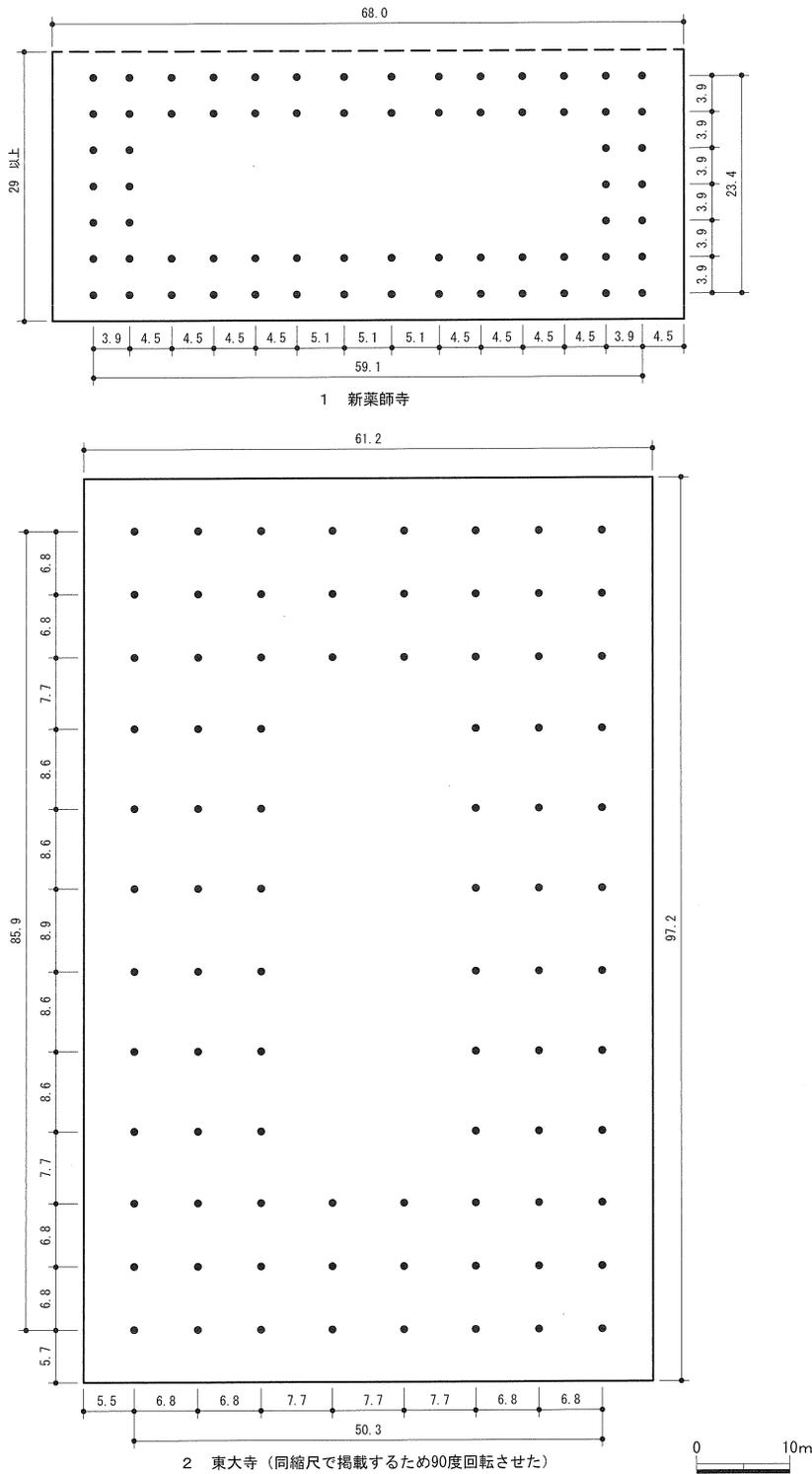
39 高仙寺金堂



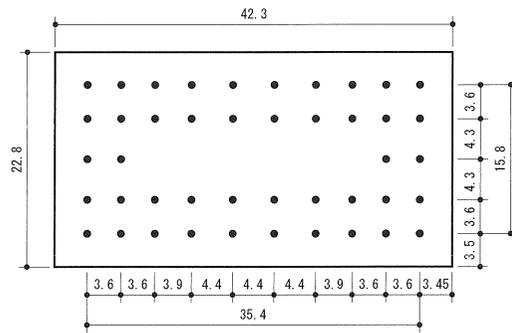
40 智谷寺金堂



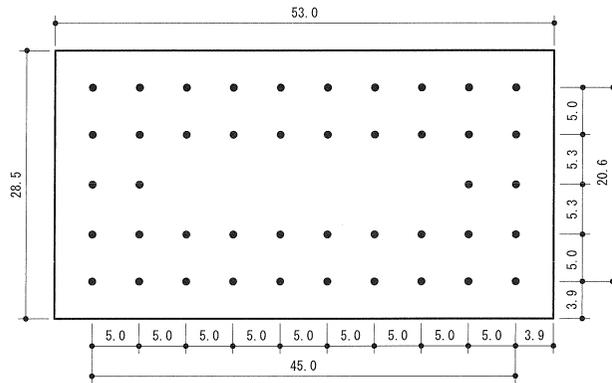
別図 1-4 古代韓半島の金堂の平面復元模式図 1:800 (番号は別表 1 に対応)



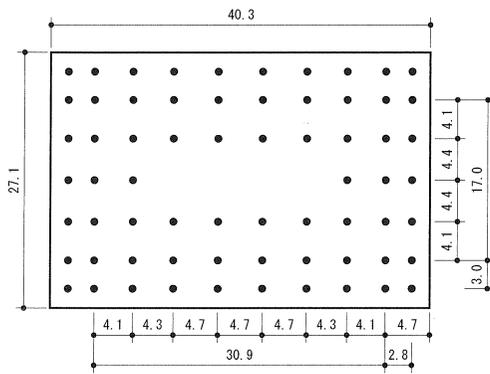
別図2-1 古代日本の金堂の平面復元模式図 1:800 (番号は別表2に対応)



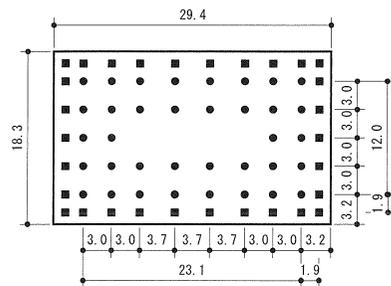
3 西大寺薬師金堂



4 大官大寺



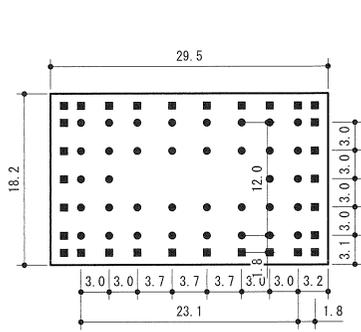
5 興福寺



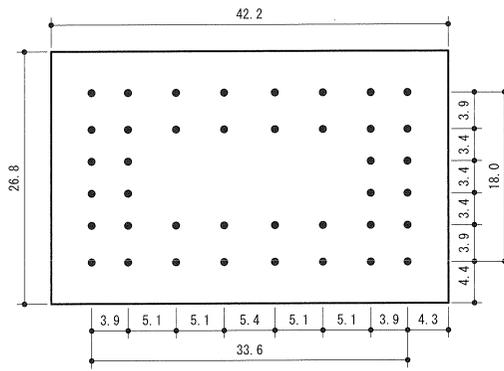
6 薬師寺



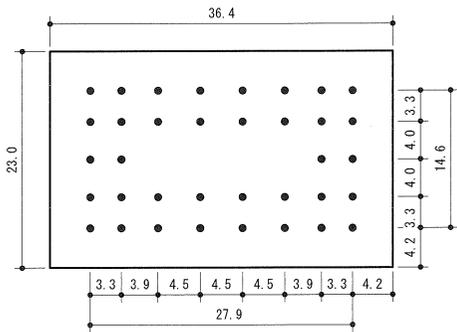
別図2-2 古代日本の金堂の平面復元模式図 1:800 (番号は別表2に対応)



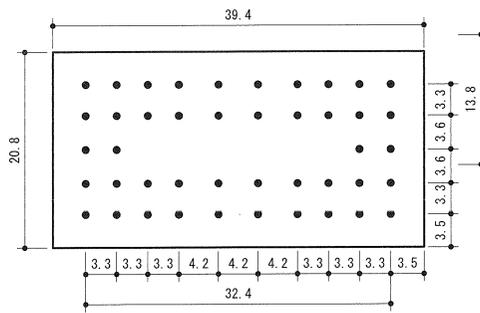
7 本薬師寺



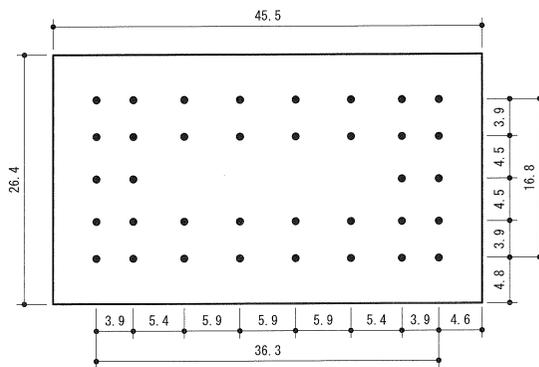
8 東寺



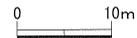
9 唐招提寺



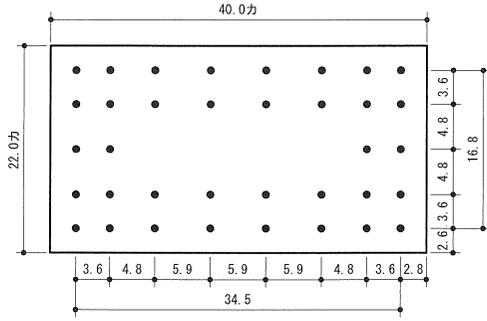
10 肥後国分寺



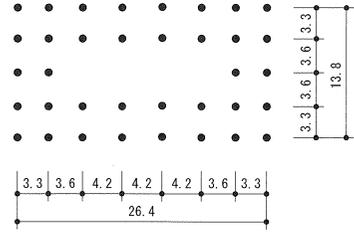
11 武蔵国分寺



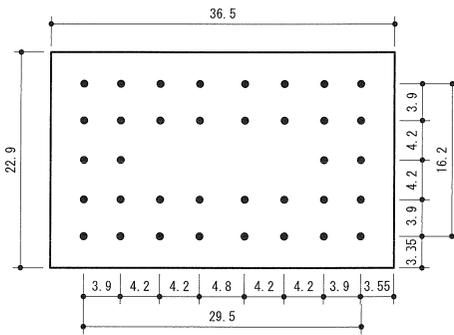
別図2-3 古代日本の金堂の平面復元模式図 1:800 (番号は別表2に対応)



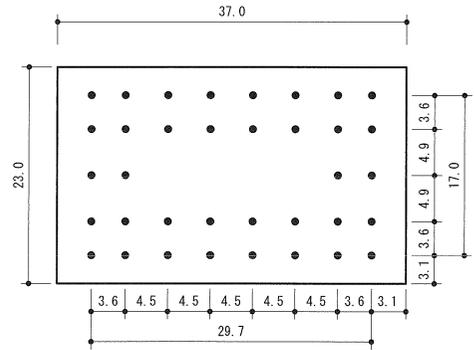
12 相模国分寺



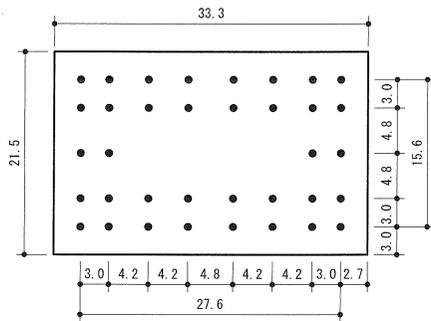
13 飛騨国分寺



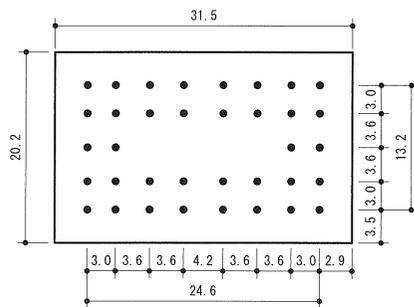
14 美濃国分寺



15 駿河国分寺



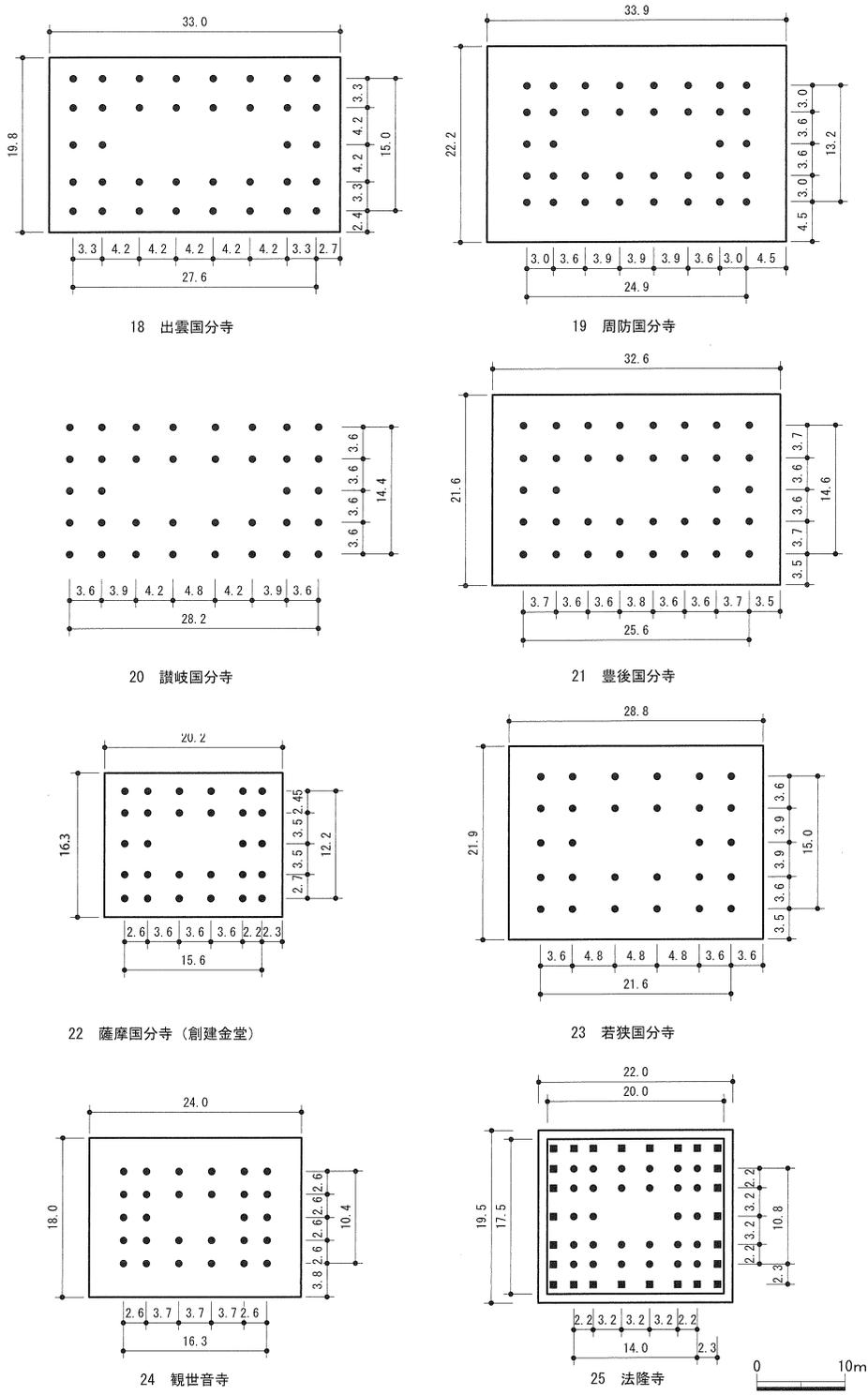
16 遠江国分寺



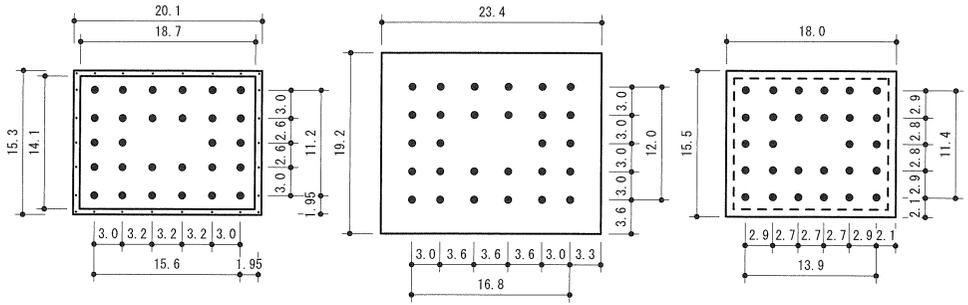
17 伊賀国分寺



別図2-4 古代日本の金堂の平面復元模式図 1:800 (番号は別表2に対応)



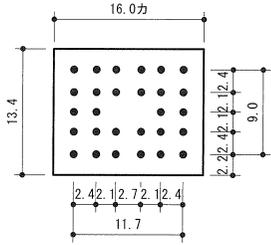
別図 2-5 古代日本の金堂の平面復元模式図 1:800 (番号は別表 2 に対応)



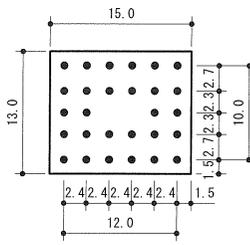
26 飛鳥寺 (東金堂)

27 川原寺

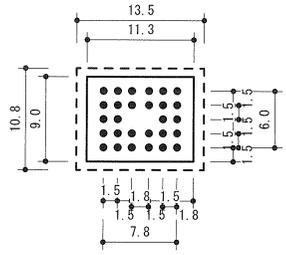
28 檜隈寺



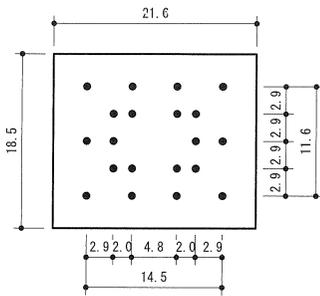
29 高麗寺



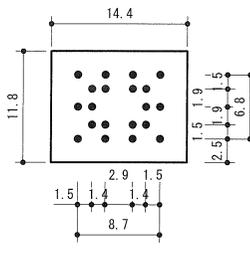
30 賞田廃寺



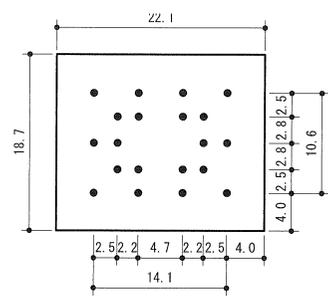
31 杉崎廃寺



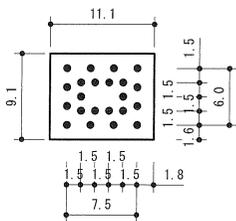
32 山田寺



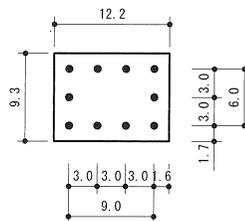
33 夏見廃寺



34 穴太廃寺 (再建金堂)



35 正家廃寺



36 海竜王寺 (西金堂)



別図2-6 古代日本の金堂の平面復元模式図 1:800 (番号は別表2に対応)

일본에서 본 한반도의 고대사원금당

箱崎 和久 (하코자키 가즈히사) · 鈴木 智大 (스즈키 토모히로) ·
海野 聡 (운노 사토시)

요 지 동아시아 고대사원의 금당유적에 대해서는 국립부여문화재연구소가 2010년에 간행한 『동아시아 고대사지 비교연구Ⅱ 금당지편』에 집성되어 있다. 본고에서는 이 책을 기본 데이터로 삼고, 8세기 일본의 금당유적이거나 현존건축을 추가하여 건물규모, 기둥배치를 중심으로 하는 평면형식, 기단규모, 하층기단 위에 세운 초석의 성격 등에 대해 분석하였다. 적어도 백제·신라의 금당 평면은 桁行(도리칸) 5칸×梁行(보칸) 3칸이 주류로 보인다. 일본 7세기의 금당은 桁行 5칸×梁行 4칸이 주류로, 8세기가 되면 桁行 7칸×梁行 4칸이 일반적이 되며, 柱間寸法(기둥간 수치)도 커진다. 梁行을 4칸으로 하는 한반도의 금당은 백제 미륵사나 백제 왕궁리폐사, 신라 황룡사에서 보이며, 이들은 각각 일본의 四天王寺(시텐노우지), 法隆寺(호우류우지), 文武朝大官大寺(문무초우다이칸다이시)의 금당과 공통점이 있다. 일본으로 전해진 건축문화가 백제로부터였다면 이들 사원이 소재하는 익산지역을 원류로 볼 수 있고, 신라였다면 황룡사가 규범이 되었을 가능성이 있다.

건물 外周의 기둥에서 기단의 빠짐이 판명된 사례에서는, 한반도의 금당은 비교적 복잡한 組物(쿠미모노, 공포[栱包])를 사용한 상부구조를 가졌다고 상정할 수 있다. 한반도의 예가 비교적 많은 하층기단 위의 礎石(遮陽間[차양칸]의 초석)에 올린 상부구조는 裳階(부연)이었을 가능성이 높으며, 신라 사천왕사나 일본 法隆寺의 예는 창건 이후의 改修에 의한 것이다. 8세기 일본에서는 전보다 부연을 가진 금당이 만들어지지만, 그 이전 부연의 상태를 고려했을 때, 遮陽間의 초석과 그에 동반하는 기단구성에 대해서는 좀 더 검토할 필요가 있다. 일본의 山田寺(야마다데라)에서 보이는 것과 같은 특이한 기둥배치를 한 예는, 한반도에서는 현재까지는 유사한 예가 없어 원류를 알 수 없다.

주제어 : 고대, 금당, 평면, 柱間寸法, 부연, 遮陽間

Ancient Temple Main Halls of the Korean Peninsula Seen from Japan

Hakozaki Kazuhisa, Suzuki Tomohiro, and Unno Satoshi

Abstract: Regarding the remains of main halls of ancient temples of East Asia, the Buyeo National Research Institute of Cultural Heritage published a compendium in 2010 titled *Dongasia godaesaji bigyo yeongu II: Geumdangjipyeon* [Comparative Research on Ancient East Asian Temple Sites II: Main Hall Remains] (2010). The current contribution takes that volume as basic data, and adding examples of main hall remains plus structures still surviving from eighth century Japan, conducts analyses which include the horizontal plan centered on building size and the placement of pillars, the scale of the podium, the nature of pillar base stones standing atop the lower podium tier, and so forth. At least for the horizontal plans of Baekje and Silla main halls, the predominant form was 5 bays longitudinally by 3 bays transverse to the main ridge. For main halls of Japan in the seventh century, 5 bays longitudinally by 4 transverse bays was mainstream, while in the eighth century a plan of 7 bays longitudinally by 4 transverse bays became common, with the length of the bays becoming larger. Main halls of the Korean peninsula with 4 transverse bays are seen at Mireuksa and Wanggunripyesa temples in Baekje, and at Hwangnyongsa temple in Silla, and these all have elements in common with the main halls in Japan of Shitennōji, Hōryūji, and Daikandaiji in the reign of Emperor Monmu, respectively. The architectural tradition brought to Japan can be seen as having its source in the Iksan region in the case of Baekje, where the above-named temples are located, or in the case of Silla, as possibly taking Hwangnyongsa as model.

From examples for which the width of the podium margin is clear from the position of the outermost building pillars, it can be inferred that main halls of the Korean peninsula had superstructures which utilized comparatively intricate bracket complexes. Superstructures standing atop pillar base stones placed directly on the lower tier of a two-tiered podium (called *chayanggan* pillar base stones) are very likely to have had a *mokoshi* (a pent roof enclosure), and in the examples of Sacheonwangsa in Silla and Hōryūji in Japan, these are the result of renovations made subsequent to the initial establishment of the structure. In eighth century Japan there were main halls that had *mokoshi* from the start, but in considering the nature of *mokoshi* for earlier times, it is probably necessary to examine further the role of the *chayanggan* pillar base stones and the construction of the podium that accompanied them. For examples having a unique pillar placement as seen at Yamadadera in Japan, at the present time there are no analogs on the Korean peninsula, so the source cannot be determined.

Keywords: Ancient period, main hall, horizontal plan, pillar span dimensions, *mokoshi* (pent roof enclosure), *chayanggan* pillar base stones